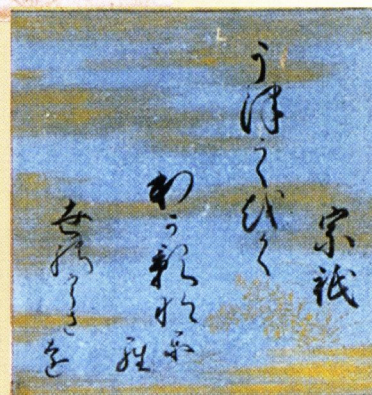
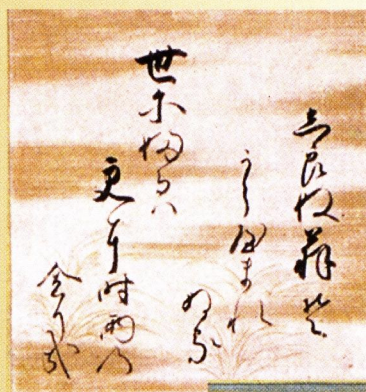


平成十二年度公開展示会

れんが

連袂の世界



併設展

電子図書館に公開された貴重書

(二〇〇〇年京都電子図書館国際会議)

目次

ごあいさつ	一
凡例	二
連歌の世界へ	四
連歌の芽生え	五
二條良基から七賢	九
宗祇とその門弟	一七
宗牧から紹巴	三〇
江戸初期の連歌・俳諧の胎動	三六
図像	四一
年表	四五
電子図書館に公開された貴重書	四七
表紙題字「連歌」は「俳諧連歌抄」より採録	

記念講演会

演 題 連歌という遊び

講 師 光田和伸氏

(国際日本文化研究センター助教授)

日 時 11月10日(金) 午後1時半～3時

会 場 附属図書館AVホール(3階)

「連歌の世界」図録正誤表

- 7頁 [三] 万葉集 13行目
(誤) 卷十二では
(正) 卷一六では
- 10頁 [七] 筑波問答 標題
(誤) 筑波 (正) 菟玖波
- 14頁 [13] かたはし 英文1行目
(誤) by Senjun → 削除
- 18頁 [一六] 三島千句 4行目
(誤) 最も詳しい跋文を備える本書は
(正) 最も詳しい跋文を備える、京大文学部
国文研究室蔵の別本は
- 33頁 [三五] 称名院追善千句 標題
(誤) 称名院追善千句
(正) 独吟注之千句(称名院追善千句)
- 34頁 [三六] 賦何木連歌 書誌1行目
(誤) 唱叱 (正) 昌叱
- 40頁 [四五] 狗獺集(犬子集) 英文1行目
(誤) *renga-style* (正) *haikai-style*
[四五] 同 6行目
(誤) 菟久波集 (正) 菟玖波集
- 42頁 [四八] 里村昌純画像 7行目
(誤) 「うつし人月にぞこゝろわれも音」
(正) 「われも昔月にぞこゝろうつし人」
- 45頁 年表 上段16行目、下段7行目
(誤) 菟久波集 (正) 菟玖波集

「連歌の世界」 補遺

菅原道真像

菅原道真（天神）は、南北朝時代から連歌の神として崇められ、連歌の会席では、天神の名号もしくは画像を掛けるようになった。画像には、衣冠束帯姿の天神像と、仙冠道服姿の渡唐天神像が知られ、興行目的によって掛け替えられた。

本図の天神は、衣冠束帯姿で上畳に坐し、憤怒の形相をした顔を右方に向け、袖下の左手で笏を握り、右手で笏頂を押さえつけている。これと同じ形式で逆向き逆手の束帯天神像が、法楽連歌に関わるものとして、長谷寺に伝来している。従って、本図も連歌会に使用された可能性はある。上部には、松、桜、梅の下絵色紙型に「帰金天満大自在／太體観自大聖尊／為度一切諸衆生／示現靈威大明神」「われたのむ人を／むなしくなす口ならば／天かしたには名をは／なかさし」とある。

〔菅原道真像〕

1 幅 絹本着色 室町時代
掛軸 水浅葱色布表紙 52.5an
(本紙:83.0 × 40.0cm) 落款
なし 画像上部に色紙形を
付す 中院家旧蔵

総合博物館 標本||乙3||95

Portrait of Sugawara-no
Michizane.

Hanging scroll. Color on silk.
Muromachi period.

い)あごやひ

平成十二年度公開展示会「連歌の世界」を開催するにあたり、ご挨拶申し上げます。

附属図書館では、日常には接することのできない貴重な所蔵資料の紹介を兼ね、毎年この時期に公開展示会を開催しております。今回は、「連歌」に焦点をあて、附属図書館および文学部が所蔵する貴重書を中心に展示しております。

連歌は、和歌から俳諧へ移る過渡期に生まれた文学です。和歌や詩と異なつて一座に会して作り上げられたもので、上句（五・七・五）と下句（七・七）を交互に数人でよみつづける文芸です。一座には指導役である宗匠と記録係であり進行係でもある執筆がいて、一句がでるごとに吟詠し、懷紙に記録していきます。南北朝に二条良基により、文芸としての位置を確立し、室町時代には高山宗砌、心敬そして宗祇、肖柏、宗長、宗牧をへて、安土桃山時代の里村紹巴あたりを最後に文芸としての意義を俳諧に譲ります。

今回は、連歌前史にあたる万葉集から全盛期へと時代を辿つて展示しております。

また、丁度同時期に、二〇〇〇年京都電子図書館国際会議が京都大学で開催されますので、本学における『電子図書館』の歴史ならびに貴重資料画像の制作過程や電子図書館収録資料の一部も併せて展示しております。是非ご覧下さい。

なお、今回の図録の作成、展示作品の選定などにつきましては、本学文学研究科国語学国文学研究室の教官ならびに大学院生の皆様にご協力をいただきました。厚くお礼申しあげます。

平成十二年十一月

京都大学附属図書館長

佐々木 丞平

【凡例】

- ・本目録は平成一二年度公開展示会「連歌の世界」（併設展「電子図書館に公開された貴重書」）の展示目録である。
- ・配列は展示番号順とした。
- ・標題は原則として最初の首題（巻頭題）に拠った。漢字については旧漢字を新漢字に改めた。
- ・書名および著者名等の事項中「」内の記述は、当該資料には表示がなく、推量あるいは他の資料に拠ったものである。
- ・大きさは冊子の場合は縦×横、軸物の場合は紙高あるいは紙幅をさす。
- ・装訂用語には諸説分かれるものがあるが、ここに用いる大和綴は列帖装あるいは綴葉装とも呼ばれるものをさす。
- ・引用本文や固有名詞などには適宜漢字や句読点をあてたものがある。
- ・影印、翻刻は参照しやすいものを適宜挙げるもので、網羅的なものではない。
- ・解題中『連歌貴重文献集成』（勉強社）を「貴重文献集成」と略し、『連歌論集』へ中世の文学（三弥井書店）は単に「連歌論集」と記した。
- ・所蔵先の「附図」は本学附属図書館、「文」は本学文学部、「総合博物館」は本学総合博物館をさす。
- ・解題は書誌的な記述については古川千佳が担当した。その他の解説については長谷川千尋、中島貴奈、藤原由華、古川千佳が分担し、各項の最後に
(H) (N) (F) (C) と記して担当を明らかにした。

連 歌 の 世 界

連歌の世界へ

長谷川 千尋

日本の詩の歴史の中で、古代以来の和歌から派生し、やがて近世の俳諧の産みの親となったのが、連歌です。連歌は中世のある時期には和歌を凌ぐ勢いで流行し、貴賤都鄙を問わず人々を夢中にさせました。狂言『箕被』には、連歌に熱中するあまり妻に家を出て行かれそうになる主人公が登場し、御伽草子『猿の草子』には、猿たちが連歌を興行して聲をもてなす有様が描かれています。その他『醒睡笑』など近世の笑話の類には、しばしば連歌師が活躍します。しかし、残念ながら現代の私たちにとっては、連歌は馴染みの薄い文芸になってしまっているようです。

五・七・五（長句）に、ある人が七・七（短句）を付け、さらにある人が五・七・五を付ける。但し和歌とは異なり、連歌ではその一句一句が独立した内容を持たなければなりません。長句、短句と交互に付け進め、百句まで連ねるのが、連歌の基本のかたちである百韻です。これを複数の人が寄り集まってするので、連歌は「座の文芸」と言われます。即興性という点では、しりとりゲームに近いものがあります。その場で創作し、鑑賞しながら再び創作へ。それを繰り返しながら共同で制作する、世界でも類例の少ない文学形態です。ところが、一旦完成し、書き記された作品に接しても、その場の興奮や感興といった連歌の醍醐味を追体験するのは難しいことです。このことが、連歌に対して馴染みにくさを感じる大きな原因となっているのでしょうか。

そこで、実際の会席で、連歌がどのように進行していったのかを、簡単に追っていききたいと思います。

複数の人がゲームをする場合、それぞれが好き勝手にふるまうと、却ってゲームのおもしろさは損なわれてしまいます。そこには、ルールが必要で、連歌のルールを式目といいます。そして、全体を統括するのは、宗匠の役目です。宗匠の監督のもとに、出された句を読み上げ、式目に適っているかどうかを確かめ、これを懐紙に書き留めるのが、執筆です。連歌の会席では、床の間に連歌の神である天神の画像もしくは名号を掛け、これを背にし、文台を前にして執筆が、その横に宗匠が着座することになっています。長谷寺蔵「天神祭祀絵」などの絵画によって、その様子を窺うことができます。

百韻の場合、懐紙は二つ折りにしたものの四枚を用い、初折の表に八句、裏に一四句、二折・三折にはそれぞれ表に一四句、裏に一四句、名残折の表に一四句、裏に八句を記します。初折のはじめには、張行年月日、場所、賦物を書き添えます。賦物は、もとは各句に詠み込むものでしたが、発句にのみ形式的に残り、「賦何人連歌」「賦山何連歌」などというのが、その百韻の呼び名になりました。例えば、著名な水無瀬三吟百韻の賦物は「何人」ですが、これは発句の「雪ながら山もとかすむ夕かな」から「山」の字を取って、「何」ところに当てはめると、「山人」の熟語が成り立つ、というわけです。

発句はその会の主賓が、脇句（第二句め）は会を催した亭主が、第三は宗匠が詠み、以下連衆が順に詠み、一回りするところ、あとは早いものがちで付けていきます。といっても、式目に抵触するものなどふさわしくない句は、宗匠によって返されてしまいます。一番最後の句である挙句までいくと、懐紙の余った部分に句上と称して、一座に加わった連衆の名前と出句数を記します。句数を見れば、その人の力量や立場がわかります。

連歌を付け進んでいく際に最も注意しなければならないのは、輪廻です。前句に付けて打越（前々句）から離れるのが大原則で、前句を挟んで打越と付句が同意同想に陥ることを輪廻といつて嫌いました。連歌は何よりも変化を尊ぶ文芸で、水の流れのように、進むことはあっても退くことはありません。式目も、この変化を保つために綿密に計算されたものです。大まかに言えば、連続して何句続けてよいかという句数のルール、反復して使用するには何句隔てなければならないかという句去のルールから成り立っています。この句数と句去の原則の協調によって、四季、夜分、光物、聲物、降物、山類、水迎、動物、植物、人倫、居所、衣装、旅、名所、恋、述懐、神祇、釈教の様々な素材が偏りなく現れるわけです。このような連歌の特徴を二条良基は、次のように表現しています。

連歌は前念後念をつがず。又盛衰憂喜、境をならべて移りもて行くさま、浮世の有様にことならず。昨日と思へば今日に過ぎ、春と思へば秋になり、花と思へば紅葉に移ろふさまなどは、飛花落葉の観念もなからんや。……さのみ執着執心なき事なるうへ、一座に更に余念なければ、悪念もおのづから盛りに待るべき事なし。

『筑波問答』

後半の部分で、良基も言及しているように、連歌は何らかの功德のある文芸と見なされ、十徳、二十五徳などともてはやされました。連歌は中世の詩ですから、当時の宗教的な観念や実利主義とも無縁ではありません。例えば、神仏に手向けて楽しませる法楽、さらには、安産・新宅造営・戦勝・旅中安全・病氣平癒などの祈祷、故人の追善など生活の様々な場面で折に触れて張行され、人々はその効能を信じていたのです。

さて、今回の展示では、古事記、万葉集に遡る連歌の起源から、中世の全盛期を経て、近世の俳諧の胎動に至る連歌の歴史を概観してみました。連歌に関する資料には、いくつもの種類があります。今回お見せするのは、百韻の原懐紙の趣きを留める卷子本、百韻を十巻連ねた千句、そうした当座の付合（前句と付句の二句一連）から優れたものを選びすぐった句集、また、連歌の理想的なあり方や稽古の仕方などを解き明かした連歌論書、必要な知識を集成した学書や辞書などです。ここに繰り広げられる連歌の世界の中心となる人物は、宗祇です。宗祇は、応永二八年（一四二二）に生まれ、連歌を和歌に匹敵する高度な文学に成長させた人です。文龜二年（一五〇二）、八十二歳で箱根湯本にて客死しますが、その終焉の間際、弟子たちの前で「ながむる月に立ちぞうかるる」という句を口ずさみ、自分はこの前句に付けあぐねているが、お前たちはどうか、と語りかけ、やがて息を引き取ったと伝えられています。

宗祇没後五〇〇年となる二〇〇二年を間近に控え、この機会に宗祇の事跡を振り返っていただくことができれば幸いです。

（京都大学大学院文学研究科国語学国文学専修）

連歌の芽生え

古来、連歌の起源については記紀歌謡に収録される日本武尊と素戔嗚人の唱和やそれより以前の伊弉諾、伊弉冉の唱和にまでさかのぼる説まである。現在では短歌形式の一首を五・七・五と七・七の二句に分け、複数の作者によって（後の独吟形式は別として）連ねられた歌の形をとっているものからを連歌とみるのが一般的になっている。すなわち『萬葉集』巻八に収録された尼と大伴家持の唱和をその起源とするものである。

第三勅撰集『拾遺和歌集』（平安時代）に連歌六首がまとまって収録され、第五勅撰集『金葉和歌集』（鎌倉時代）には初めて連歌の部立てがあらわれるのをみればしだいに人気が高まっていたことを見て取ることができよう。さらに源俊賴の歌論書『俊賴髓脳』（無名抄）にみえる連歌論からも初期の単なる即興的な問答歌から付合の様式にまで意識が及ぶようになっていくことがうかがえる。

短連歌は徐々に長さを増し、百韻形式の出現、詩の内的充実とともに専門の連歌師が生まれ、連歌壇を形成していくまでに至る。

〔一〕日本書紀

奈良時代に編纂された神代から持統天皇十一年（六九七）に至るまでを収録した日本最初の勅撰歴史書。

巻第七にみえる日本武尊と乗燭人の唱和「珂比磨利克玖波塙須擬氏異玖用加祢菟流」（新治、筑波を過ぎて、幾夜か寝つる）、「伽餓奈倍氏用珂波虚虚能用比珂波苦塙伽塙」（かがなべて、夜には九夜、日には十日を）は四・七・七と五・七・七、三句ずつの片歌問答といわれるもので、『古事記』にも同じ歌がでている。ト部懷賢（兼方）が自著『釋日本紀』においてこの片歌問答を連歌の起源としている。

伝本は古写本では断簡も含めると平安時代にまでさかのぼるが、三〇巻元本として伝承されるものは少なく、内閣文庫に所蔵される永正本が現存最古といわれる。系統は平安時代からの古写本と鎌倉時代以降にト部家の校訂を経たト部家本の二系統に分けられる。版本は江戸時代になって初めて神代卷二巻が慶長四年（一五九九）に刊行された（慶長勅版）。

本書はその次に刊行された慶長一五年（一六二〇）、三白の跋をもつ古活字版で、三〇巻揃って刊行されたはじめての版。鈴鹿家旧蔵書。（C）

鈴鹿本について

名称由来の鈴鹿家は本学にすぐ近い京都吉田神社の社家で、神道関係書及び古典等を伝承しており、その多くは現在、奈良の大和文華館に所蔵されている。当館にはまとまった形ではないが、鈴鹿本『今昔物語集』（国宝）をはじめ、同家旧蔵書を蔵している。

〔1〕日本書紀

30巻6冊 古活字版 慶長15年
(1610) 跋刊 四つ目袋綴 刷毛目
薄茶色表紙 本文料紙：楮紙
27.4×19.8cm 四周双辺 半面8
行注双行 柱題：日本紀 跋：慶
長15年・洛納野子三白誌 蔵書
印：「鈴鹿氏」(朱文、印主：鈴鹿
隆啓)、「吉田神社／杜司中臣隆
啓／朝臣之章」(朱文、印主：鈴鹿
隆啓) 卷第一初丁右下に「宣賢」
の墨書あり まま付箋あり 巻後
に墨書校合奥書3丁を付す
附図 5-03に9 (19110)

“Nihon Shoki”

Chronicles of Japan compiled by
Imperial command.

Vol. 7 (30 v. in 6)

Old type version.

Edo period, dated 1610.

〔二〕釈日本紀

ト部懷賢（兼方）による『日本書紀』の注釈書。

巻二四「和歌」の部において「凡連歌意者如辞是者連歌之濫觴也」とのべ、
〔二〕の片歌問答を連歌のはじまりとし、以来連歌が「筑波の道」とも称されるようになった。

成立は文中に見える文永十一年（一二七四）―建治元年（一二七五）の記事や正安三、四年（一二〇一、一二）の奥書があることから、鎌倉時代中期といわれる。編者の生没年は不詳であるが、弘安年間（一二七八―一二八八）から嘉元（一二三〇―一二三六）年間頃に記録が残る。

編者出身のト部家あるいは分流の吉田家にとつて日本書紀研究は代々家学の中心であり、鎌倉時代には古典研究も盛んになされた。懷賢はそれまでの日本書紀研究とト部家の家学としての『日本書紀』研究を集大成し『釋日本紀』を著した。『釋日本紀』との関係を示す懷賢（兼方）書写、弘安九年（一二八六）の奥書をもつ『日本書紀』神代卷二巻のト部家本は文化庁に所蔵されている。また注釈中には現在では散逸してしまった古典を多く引用しているため、様々な方面の研究に有用な文献ともなっている。本書は平松家旧蔵の無刊記本。（C）

平松本について

文庫名由来の平松家は近世初期西洞院家からわかれ、時庸を始祖とする。同家は日記の家といわれるほど記録を残すことが家学であった。伝来の典籍類の多くを平松文庫として当館に蔵し、なかでも平安時代の平信範の日記『兵範記』、平範国の日記『範国記』、平知信の日記『知信記』は重要文化財に指定されているが、宗祇、肖柏などの連歌関係書も多く含まれている。

〔2〕釈日本紀

28巻5冊 刊本 ト部懷賢釋
[江戸時代]刊 五つ目袋綴 刷毛
目薄茶色表紙 本文料紙：楮紙
26.7×20.8cm 四周单辺 半面8
行注双行 標題は卷第二以降の首
尾題及び柱題による 卷第一の首
題：釋日本書紀

附図 平松第1門に1 (147046)

“Shaku-Nihongi”

Commentary of Nihon-Shoki by
Urabe-no Kanekata.

Hiramatsu collection.

Vol. 24 (28 v. in 5)

Edo period.

〔三〕万葉集

飛鳥・奈良時代の歌集。

巻八「秋相聞」にみえる尼と大伴家持の「佐保河之 水平塞上而 殖之田乎」(佐保川の水を堰あげて植ゑし田を)、「刈流早飯者 獨奈流倍思」(刈る早飯はひとりなるべし)はそのまえに掲げられた或者から尼への贈歌「手母須麻尔 殖之芽子尔也 還者 雖見不飽 情將盡」(手もすまに 植ゑし萩にや却りては見れども飽かず情尽さむ)、「衣手尔 水澁付左右殖之田乎 引板吾波倍 真守有栗子」(衣手に 水澁付くまで植ゑし田を 引板我が延へ まもれる苦し)に対する答歌。この唱和をもつて連歌の始まりとしたのは鎌倉時代に成った『八雲御抄』の著者順徳院であるが、五・七・五と七・七句からなる短連歌の形をとったものとしては文献上に見える最古のものといわれている。

伝本は古点本、次点本、新点本系の三系統に分けられる。

本書は鎌倉時代の和学者仙覚の改訂を経た新点本の一つで、頼直本系の近衛家旧蔵書。当館には同じく仙覚新点本の別系である中院本系、また巻十二では最古の伝本といわれる次点本の一つ尼崎本なども蔵している。(C)

近衛本について

文庫名由来の近衛家は藤原北家の嫡流、摂関家として『御堂関白記』をはじめ、歴代の文書典籍類を多く蔵してきた。現在は伝世の典籍類は京都・右京区に財団法人陽明文庫として蔵されているが、陽明文庫設立以前に当館が同家資料の寄託を受けていたことから、その一部が当館に寄贈され、漢籍類を中心とした近衛文庫となっている。

〔3〕万葉集

20巻20冊 写本 [室町末期]写
大和綴 黄檀色表紙 雲紙題簽
本文料紙：斐紙、斐楮混合紙
30.2×21.0-30.2×21.2cm 無辺界
(一部 天地押界) 半面7行 蔵
書印：「陽／明／蔵」(朱文、印
主：近衛家)、「近衛藏」(朱文、印
主：近衛家)、「近衛本」(朱文、印
主：近衛家)

附図 近衛本[4-23]72頁
(1944853~872)

“Man'yo-shu”

Anthology of poems.

Vol.8 (20 v. in 20)

Hand-written. Muromachi period.

Konoe collection.

〔四〕拾遺和歌集

花山院(九六八—一〇〇八)の好尚による第三勅撰和歌集。

巻十八「雜賀」の部に右大将実資「流俗のいろにはあらず梅花」、むねかた(致方)の朝臣「珍重すへき物とこそ見れ」以下、女「人心うしみついまはたのましよ」、良岑宗貞「夢に見ゆやとねそすきにける」まで六首の連歌が収録されている。

『拾遺和歌集』は勅撰集であるにもかかわらずその成立事情ははっきりしていないが、文中登場人物の官位より寛弘二年(一〇〇五)から同四年(一〇〇七)の間に成立したと見られる。

伝本は藤原定家(一一六二—一二四二)の書写と校訂を経た定家本系とその他の異本系に二分される。

本書は延寶五年(一六七七)に中院通茂(一六三一—一七一〇)が藤原定家の自筆校訂本を直接臨写した定家本系流布本で、テキストはもとより定家の独特な書体もよく再現されている中院家の旧蔵書。(C)

中院本について

文庫名由来の中院家は鎌倉時代に久我家から分かれた堂上公家で、通方を家祖とする。代々勅撰集の歌人も多く、一四代通勝、一五代通村は世尊寺流の能筆としても名声があった。同家伝来の典籍文書類の多くを当館及び本学総合博物館が蔵している。当館では日記、歌書、物語等のおもに典籍類を中院文庫として蔵している。

〔4〕拾遺和歌集

20巻1冊 写本 延寶5年(1677)
中院通茂筆 大和綴 金銀泥小花
ちらし表紙 本文料紙：斐紙
24.0×15.2cm 無辺界 半面12行
奥書：「右拾遺集申出定家卿自筆
臨写／新院御本(冷泉家相傳之本
先年／被召之所被臨写也)行数字
形至／書損等不違一點書写之及数
反校合／独校二反／讀合一反」畢
尤以可謂證本但御本雜賀／二枚之
奥／ある人の産して／侍ける七夜
ノ下／一面有白紙此本誤直／書續
之依之奥之札紙有一枚之相／違者
也／延寶五年仲秋下浣／特進源
(花押)」

附図 中院本[VII]93 (260752)

“Shui Waka-shu”

Anthology of poems compiled by
Imperial command.

Vol.18 (20 v. in 1). Hand-written.

Edo period, dated 1677.

Nakanoin collection.

〔五〕金葉和歌集

白河法皇下命の第五勅撰和歌集。

卷第一〇後半に「連歌」の部立てが初めて登場し、永成法師「あつまひとこゑこそ北に聞ゆなれ」、権律師慶範「みちのくにより こしにやあるらむ」以下一七首を収録している。

『金葉和歌集』は天治元年（一一二四）頃の初奏から三回に及ぶ奏覧を経て受納された。過去四代の勅撰和歌集にならった撰歌方針を踏襲し、過去の勅撰歌集歌人の和歌を中心にした最初の撰集（初度本）は却下されたため、次は一転して当代歌人を中心に据えた斬新な撰歌が試みられた。初撰、改撰を重ね連歌一七首を含み再度の奏覧（二奏本）におよんだが、再び却下されている。さらに編成をやりなおし、和歌六三七首、連歌は一一首に厳選した末、大治元年（一一二六）、二年（一一二七）に俊頼自筆の下書を内覧に奏したところそのまま受納されたという（三奏本）。

本書は連歌一七首を収録した二奏本系統流布本の一つ。当館には、決定版として受納された三奏本系のうち天保九年（一八三八）・藤園熟蔵版本を蔵している。（C）

〔5〕金葉和歌集

10巻1冊 写本 [源俊賴撰]
[江戸時代]写 大和綴 灰緑色布
表紙 金箔置題簽 本文料紙：斐
紙 24.3×18.1cm 無辺界 半面
10行 書題簽書名：金えう和哥集
蔵書印：「堀／蔵書」(朱文)
附図 4-23[1]9 (57984)

"Kin'yo Waka-shu"

Anthology of poems compiled by
Imperial command.
Vol.10 (10 v. in 1)
Hand-written. Edo period.

〔六〕無名抄

源俊頼（一〇五五頃—一二二九以前）が鳥羽天皇の皇后（高陽院泰子）となつた藤原忠実の女に贈つた平安時代の歌論書。『俊頼髓脳』、『俊頼口伝』、『秘抄』などとも呼ばれる。

「次に連歌といへる物あり。例のうたのなからをいふなり。本末心にまかすべし。そのなからがうちに、いふべき事の心を、いひはつるなり。心のこりて、つくるひとに、いひはてさするはわろしとす。たとへば、なつのよをみじかきものといひおきし」と云て、人は物をやおもはざりけん」とすゑにいはずはわろし。この調を連歌にせむときは、なつのよをみじかき物とおもふかな、と可云なり。さてぞかなふべき」と連歌の付合について論じ、「(三)に掲出した『萬葉集』の尼と大伴家持の唱和をはじめ『後撰集』、『拾遺抄』所収の具体例をあげて論じている。

伝本は定家本系統（応永一六年転写本、「此草子安元之比聞…」という定家の奥書をもつ）と顕昭本系統（「寿永二年…」の奥書をもつ）の二種に大別されるが、本書は後者に属する数少ない完本。（C）

〔6〕無名抄

1冊 写本 [源]俊頼撰 [江戸時代]写 四つ目袋綴 布目地杉色後補表紙 本文料紙：楮紙 27.1×19.5cm 無辺界 半面12行
首題なし、標題は扉(元表紙)による 奥書：「壽永二年八月二日於紫金臺寺／見合了依知足院入道殿下命／奉為賀陽院俊頼朝臣所作今／題家朝臣本号俊秘抄／自教懿御僧相傳之 智範之」、「一校了／銀青光祿大夫(花押)」(朱書) 久世家旧蔵本 附図 4-22[4]3 (57976)

"Mumyo-sho"

Critical view of waka-style poems
by Minamoto-no Toshiyori.
Hand-written. Edo period.

二条良基から七賢

一四世紀後半、二条良基や救済きうさいの働きにより連歌は飛躍的な展開を遂げた。良基は摂政・関白を歴任した高貴の身でありながら、当時幽玄な作風をよくした地下の連歌師救済を師と仰ぎ、順覚・信照・周阿ら連歌師と交流した。これ以降、宮廷・貴族の間で行われた堂上連歌と、毘沙門堂や法勝寺などの寺社の花の下で、堂上以上の隆盛を見せていた地下連歌の流れがひとつになった。良基は、初の准勅撰の連歌撰集『菟玖波集』を撰進し、連歌に和歌と同等の地位を与えようとした。また、乱れていた連歌の式目を整備して「応安新式」を制定、さらに『筑波問答』『十問最秘抄』など多くの連歌書を著した。良基の時代に確立された式目や理論は、その後も根本的には変わることなく受け継がれることになる。

しかし、その後一世紀の間に、連歌は良基の理想とは別の方向に進み、『菟玖波集』でさえ埋もれた存在になってしまったという。永享年間（一四二九―一四四〇）になって、連歌を再興したのは、冷泉派の歌人正徹に学んだ宗砌、智蘊、心敬らである。この三人に、専順、行助、能阿、賢盛を加えた七人は、宗祇によって『竹林抄』に作品を収められ、七賢と呼ばれている。

〔七〕筑波問答

二条良基の代表的な連歌論書。本文中に延文二年（一二五七）の『菟玖波集』撰進・准勅撰に言及していること、応安五年（一二三二）の識語を有する諸本の存在から、その間の成立と考えられる。

常陸国筑波辺に住み、定家や為家にも教えを受けたという老翁が、作者の邸を訪れ、連歌に関する問答を交わすという、いわゆる鏡物（大鏡などの構成）の手法を用いている。連歌の起源を伊弉諾・伊弉冉の唱和に求め、それ以来の歴史を上古・中古・近世に分けたうえで、『菟玖波集』に収められた当代の風体を模範とすべきことを説く。また、連歌は和歌と同等の文芸であること、堂上と地下が一体となって当代の連歌を導いたことなどの記述に、良基の基本的な連歌観が示されている。翻刻は、古典文学大系66、古典文庫99にある。

本書は、国会図書館本の本文に比較的近く、末尾近くに二箇所の脱文がある。

（H）

谷村文庫について

富山県出身の事業家故谷村一太郎氏の旧蔵書。事業によって得た益は典籍蒐集にあてられ、その蒐集範囲は奈良時代の資料にまでさかのぼる。奈良、平安時代の写経類、鎌倉、室町時代の稀観書、五山版をはじめとする多くの版式、あるいはそれらのもとなった宋版、元版漢籍類など時空をわたる蒐書群となっている。

なお同文庫には兼載を始祖とする連歌、古今伝授の家・猪苗代家伝来の連歌書がふくまれ、『九』飛鳥井栄雅筆『連歌初学抄』や寛永の三筆ともいわれた能書家近衛信尹の筆になる『四〇』『賦何木連歌』、『四一』『賦千何連歌』をはじめとする稀観書も多い。

〔7〕筑波問答

1冊 写本 〔二条良基撰〕〔江戸時代初期〕写 大和綴 薄鈍色表紙 本文料紙：楮紙 23.2×15.9cm 無辺界 半面10行 内題なし、標題は打付書外題による
附図 谷村文庫・猪14-24172（763468）

“Tsukuba Mondo”

Learned book of renga-style poems by Nijo Yoshimoto.
Hand-written. Edo period.
Tanimura, Inawashiro collection.

〔八〕和歌集心鉢抄抽肝要

連歌学書。室町末期写の本書が、孤本である。各巻末の識語には、二条良基の伝書から抽出して、永徳三年（一三八三）に相伝されたとあるが、その真偽は未詳とされている。内容は、「和歌ノ道理ヲ弁テ後詞ヲ分テ連歌ニ可取」との考え方に基つき、部立別にした一九一八首の証歌群、四六九句の例句群に最も多く筆を費やしている。この他、嫌詞、異名、付合、賦物等、連歌に必要な知識を多岐に渡って集成している。その中に、『連理秘抄』『知連抄』『光源氏一部連歌寄合』などの良基の連歌書と共通する記述を含み、総じて良基時代の地下連歌師間で相伝された秘説を、よく伝えていると見られる。「作者名乗字」「歌可在韻字」等には、特殊な宛字が使用されている。（H）

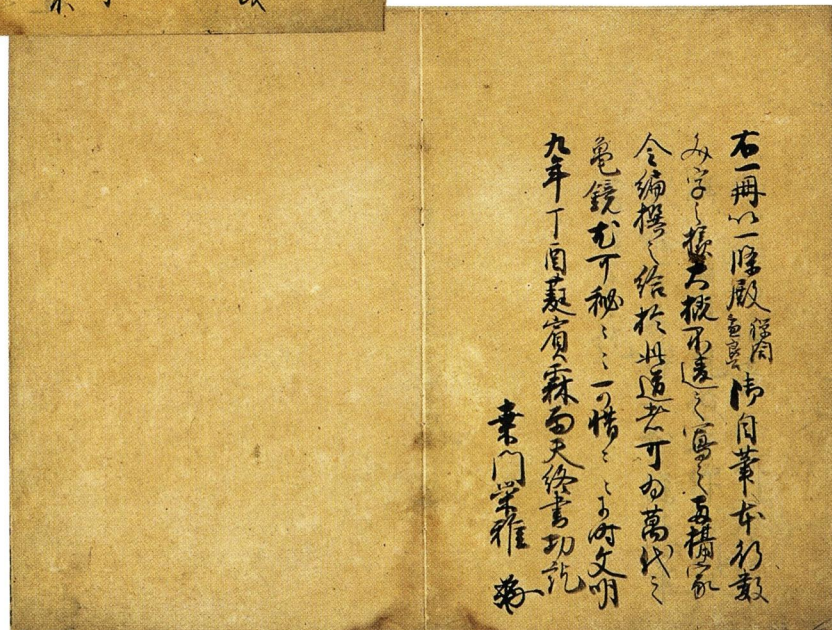
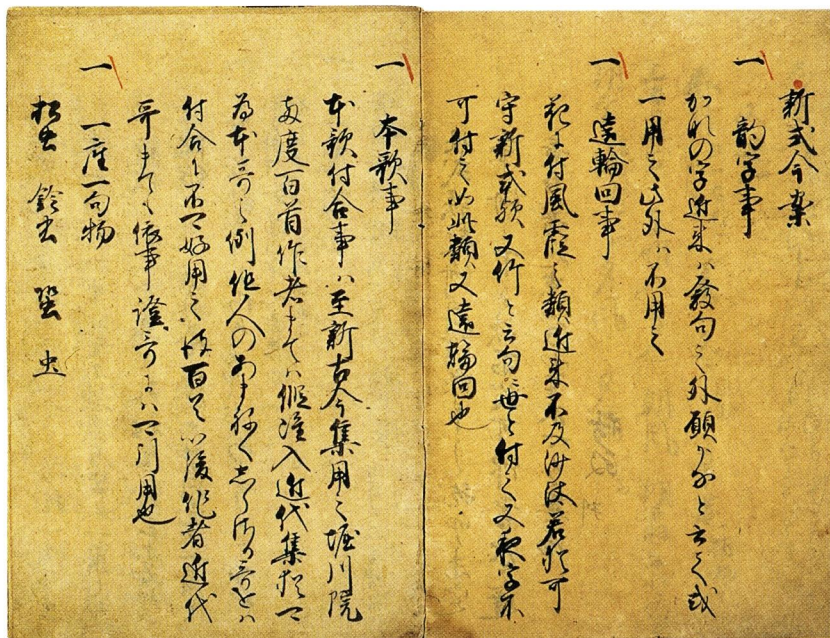
〔8〕和歌集心鉢抄抽肝要

3巻（上中下）3冊 写本 〔室町時代末期〕写 杜若模様後替布表紙 見返：葡萄描絵斐紙 本文料紙：楮紙 28.0×22.1cm 無辺界 半面15行 書題簾の書名：心鉢奥書：「武條殿莫傳内心鉢書抽寫卷第上／傳成阿 永徳参年 三月日／傳二日」、「武條殿莫傳内心鉢書抽寫卷第中／傳成阿 永徳参年 三月日／傳二日」、「武條殿莫傳内心鉢書抽寫卷第下／傳成阿 永徳参年 三月日／傳二日」

文 國文學I Fc11（169378）

“Waka-shu Shintaisho chu Kan'yo”

Learned book of waka-style poems.
Hand-written. Muromachi period.



〔九〕連歌初学抄
 一条兼良編。享徳元年（一四五二）二月以後までもなく成立、後崇光院（貞成親王）に進上された。連歌の主要な法則を集成し、「賦物篇」「式目篇」「和漢篇」から成る。「賦物篇」はそれまでの賦物を取捨し、「山何・何路・何木・何人・何船」の五ヶ賦を特に用いるよう指定し、計三九の賦物に対して適合する語を列挙する。「式目篇」は、まず一条良基の「連歌新式」を掲げ、次いで宗砌の意見を聞いて兼良が定めた「新式今案」を掲げる。「和漢篇」は、和漢聯句のための式目だが、本書には収録されていない。本書は、飛鳥井栄雅が兼良自筆本を以て書写した古写本で、古典文庫63、『連歌論集』下に翻刻されている。（H）

〔9〕連歌初学抄

1冊 写本 一条兼良撰 文明9年(1477)、[飛鳥井]栄雅写 大和綴 木瓜文黄棕色布表紙 見返：金銀泥切箔ちらし斐紙 本文料紙：斐紙 25.9×17.1cm 無辺界 半面8行 奥書：「此一帖為備廢忘聊令編／撰之處自院被尋仰之間外／見雖有其憚一本染愚筆／寫進上之訖」、「右一冊以一條殿〔禪閣／兼良公〕御自筆本行數／文字之様大概不違之寫之兩攝家／令編撰之給於此道者可為萬代之龜鏡尤可秘、可憐、于時文明／九年丁酉庭寶霖雨天終書功訖／桑門栄雅〔花押〕」 附図 谷村文庫・猪14-24141 (763467)

"Renga Shogakusho"

Learned book of renga-style poems by Ichijo Kanera.
 Hand-written. Muromachi period, dated 1477.
 Tanimura, Inawashiro collection.

〔二〇〕 密伝抄

本書は、完本としては唯一の伝本である。末に「宗砌在判」とある。

内容は、①「てには」について記した部分、②善阿や救済ら南北朝頃までの作者の風体を記した部分、③連歌の付け方について記した部分から成る。このうち、①と②は混在しており、本書の書写以前に錯簡が生じていたと考えられる。①と③の記述は、文明一四年（一四八二）成立の『塵荊鈔』^{じんけい}巻五にほぼ一致する記述が見える。但し、①のてには論は『密伝抄』の方にやや脱落や誤りが多く、③の例句は『塵荊鈔』とは異なる独自の例句を挙げる箇所もある。②の風体論は、「八」の『和歌集心脉抄抽肝要』の記事を簡略化した内容で、『塵荊鈔』とも部分的に一致する。従って本書は宗砌の述作ではなく、先達より相伝したものをまとめた書であろう。

なお、「已上 宗砌在判」の直前に置かれた「是は一色殿に周阿が口伝申候き時の便節被罷向候忠に相伝仕候也」云々の跋は、本書全体にかかる宗砌の跋文とされてきたが、「一 発句の切たると申は」の条に改行もなく続いていることなどから、この一条にのみかかると考えられる。貴重文献集成3に影印、連歌論集3に翻刻がある。（H）

〔10〕 密伝抄

1冊 写本 [室町時代末期]写
四つ目袋綴 丁子茶色後補表紙
本文料紙：楮紙 26.2×17.8cm
無境界 半面9行内外 元表紙に
「宗砌作」とあり「北野新式目」を
付す 末尾墨書：「傳善寺 釈杏
□」 文 國文學IGbJ3 (235315)

“Mitsuden-sho”

Critical view of renga-style poems
by Sozei.

Hand-written. Muromachi period.

〔二一〕 百首和歌

寛正四年（一四六三）三月、郷里紀伊国に下向した心敬が、田井庄宮に詠進した法楽和歌。五月にはその田井庄で『ささめごと』上巻を著し、土地の連歌好士に与えている。

本百首には自注があり、心敬の生い立ちを伝える資料でもある。本書の注は、自筆自注である天理図書館蔵の一軸（横山重・野口英一『心敬集論集』に翻刻）の注とほぼ同様ながら一部出入りがある。箱書に自筆とあるが、自筆ではなく、自筆自注の一本を転写したと考えられる室町期の写本である。本書の影印は、貴重文献集成5、翻刻は新日本古典文学大系『中世和歌集 室町篇』にある。

（H）

〔11〕 百首和歌

1軸 写本 心敬撰 [室町時代]
写 卷子 亜麻色地牡丹唐草布表紙
見返：金箔置金砂子ちらし
本文料紙：楮紙 25.6cm 無境界
箱題：百首和歌 奥書：「寛正第四
曆暮春下旬／於紀州名草／郡田
井庄宮為備聊法楽卒尔／詠之述心
懐計每首狂哥左道、／心敬」、
「哥をこと葉にていひあらはし候
へは／いかはかりの秀逸さへ裳に
おち／無下になり候と古人申候を
これは／盡瓦礫狂哥をおこまし
く申／あかし候へははちのうへ
のはちか／ましさにてこそ候へ／鶴
若」 附圖 4-23]に11貴別 (80184)

“Hyakushu Waka”

Waka-style poems dedicated to
the gods by Shinkei.

Handscroll. Hand-written.

Muromachi period.

〔二二〕私用抄

本書の外題による『私用抄』が、本作品の一般的な書名となっているが、伝本で書名の明らかなものは、『竹馬抄』もしくは『初心抄』と題している。また、伝本のほとんどは、文明三年（二四七一）、関東滞在中の心敬が、川越の太田道真に与えたことを示す奥書を有する。

内容は、連歌新式に規定されていない式目去嫌・連歌に用いる言葉の語義や表記の仕方について箇条書きにし、続けて執筆の作法について述べ、最後に連歌の稽古の心構えから勅撰集の批判・歌道の衰退に言い及んで結んでいる。

本書は、『私用抄』という書名や、道真に与えた旨の奥書がない点、式目に關する項目の並べ方が未整理である点などから、より草稿に近い段階のものであった可能性もある。本書の影印は貴重文献集成4に、翻刻は古典文庫113にある。（H）

〔12〕私用抄

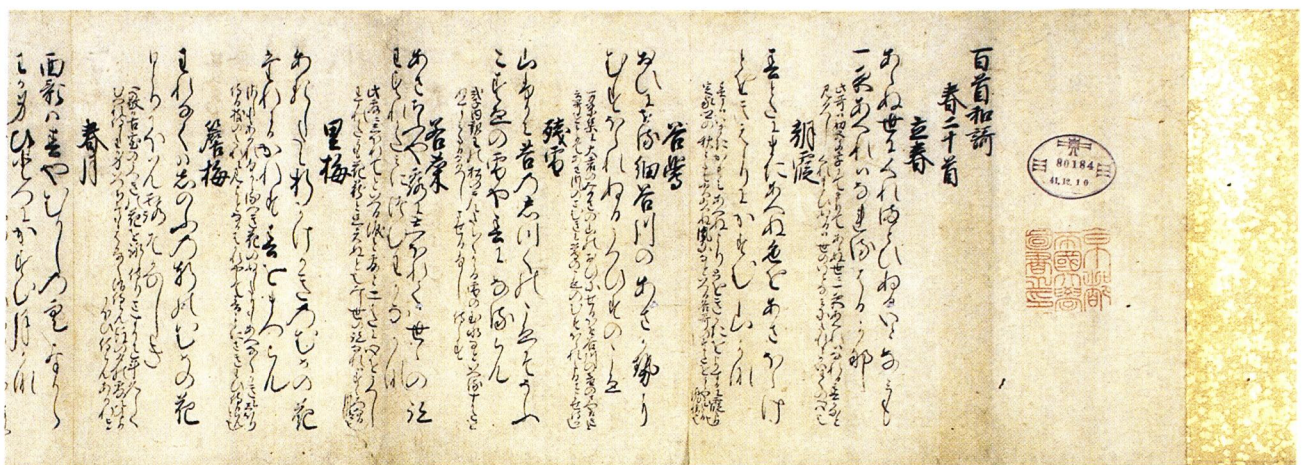
1冊 写本 心敬草 明応4年
(1495) 写 四つ目袋綴 藍色後補
表紙 本文料紙：楮紙 24.9×
16.5cm 無辺界 半面9行 首題
なし、標題は扉(元表紙)による
奥書：「明應四年中秋末書写畢如
本注之不審多之」 元表紙下墨
書：「祐範」

附図 4-24/118 (1829057)

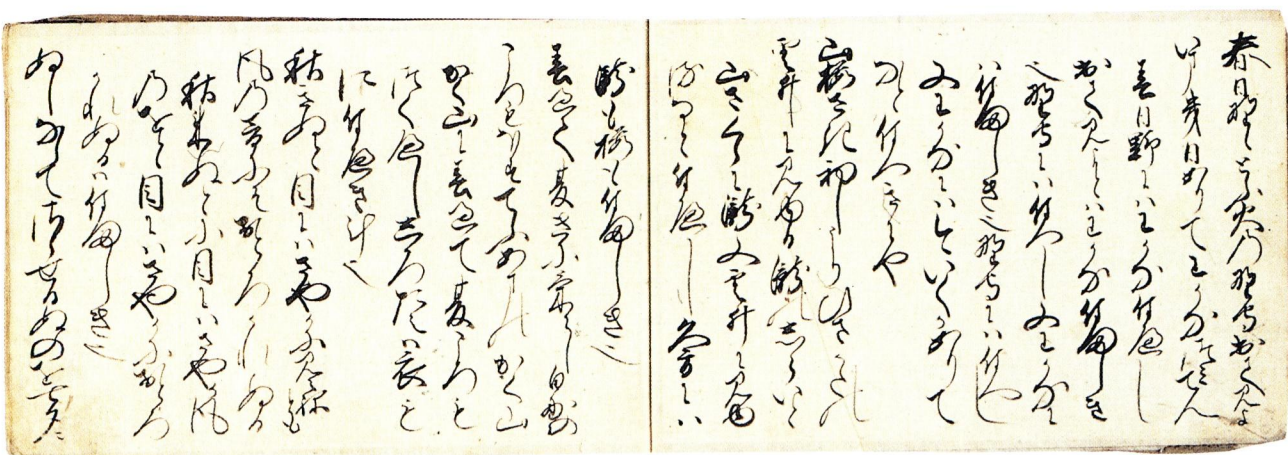
“Shiyo-sho”

Learned book of renga-style
poems by Shinkei.

Hand-written. Muromachi period,
dated 1495.



〔11〕百首和歌



〔二三〕 かたはし

連歌論書。専順作と伝えられるが、成立事情を示す信頼すべき奥書は残されていない。始めに「連歌に古歌をとりて付け侍る事誰も心得侍れども、小児の爲にとて承間、片端書付て見侍るべし」とあり、以下、本歌の内容にふさわしい寄合の詞の選び方、詞の付け方のよしあし、稽古の仕方などについて具体的に説く。本書は、真如蔵旧蔵の室町時代の写本で、諸本の中でも古写に属する。諸本間に本文の大きな異同はない。

作者と伝えられる専順は、京都六角頂法寺の僧侶で、華道池坊の宗家ともいう。七賢の一人だが、連歌の師承は明らかでない。その洗練された作風は、晩年の弟子宗祇にも受け継がれている。連歌論集3に翻刻がある。(H)

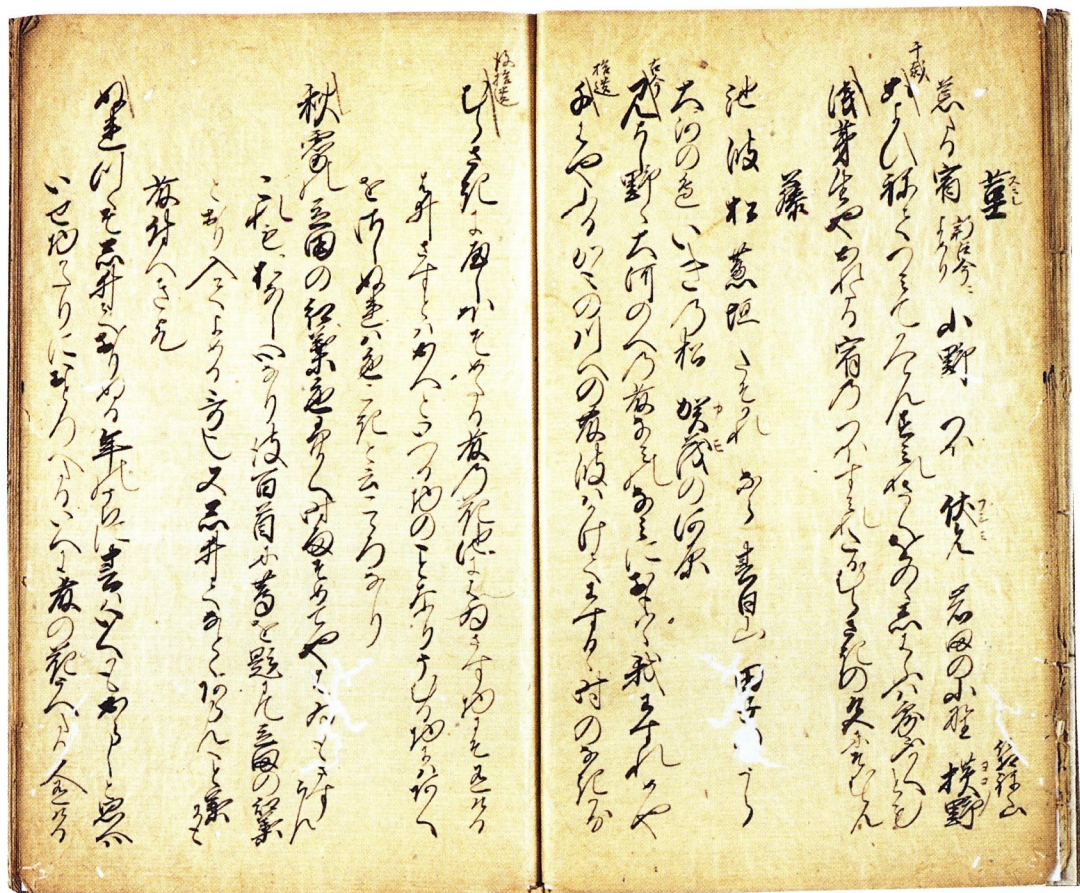
〔13〕 かたはし

1冊 写本 [室町時代末期]写 四つ目袋綴 丁子茶色表紙 本文料紙：楮紙 13.4×21.1cm 無辺界 半面12行 奥書：「法印専順作分也」、「文明十三年六月十日／宗可」、「永祿九年三月十二日書」 初丁右端墨書：「山門東塔南谷浄教房眞如蔵二百廿八 善」

文 國文學J[Gb]12J貴 (447662)

"Katahashi"

Critical view of renga-style poems by Senjun.
Hand-written. Muromachi period, dated 1566.



(二四) 連歌作法

連歌寄合書。太田武夫氏藏本の識語により『大胡修茂寄合』と通称される。

同識語によれば、大胡修茂が、心敬・宗祇の指導をもとに編集を手がけ、文明四年（一四七二）に成立している。修茂は、『新撰菟玖波集』に五句入集する、関東の武将。

伝本は、京大文学部国文研究室蔵本（本書）、三輪正胤氏蔵本、太田本の三本が知られる。京大本によって内容を示すと、最初に、四季部、雑部、名所の部類別に、「梅」から「志賀」に至る八五項の寄合を挙げ、それぞれに証歌、解説を加える。（京大本の以上の部分の翻刻は『連歌寄合集と研究』末尾には発句切字等について例句を挙げて解説し、さらに、天文二四年（一五五五）に本書が書写された時点で、「連歌可嫌追加」とする記事が増補されている。（この部分は、三輪本とともに『大阪府立大学人文学論集』一四に翻刻される。）寄合語と証歌には諸本によりかなりの出入りがある。（H）

頼原文庫について

本学文学部教授であった故頼原退蔵氏の旧蔵書。近世文学関連の蒐書で、本学文学部図書室に所蔵する。氏の研究の専門であった俳諧関連資料が中核をなすが、上代文学から医書まで収書範囲は広い。

[14] 連歌作法

1冊 写本 [室町時代]写 四つ
目袋綴 薄茶色後補表紙 本文料
紙：楮紙（斐混りか） 29.3×19.2cm
無辺界 半面9行 首題なし、標
題は扉（元表紙）書題簽による 末
尾墨書：「天文廿四年卯月十七日
元家（花押？）」

文 国文学 頼原文庫 [Gb]48 (1021126)

“Renga saho”

Learned book of renga-style poems.

Hand-written. Muromachi period.
Ebara collection.

〔二五〕竹林集聞書

『竹林抄』の古注釈。

『竹林抄』は宗祇編の連歌撰集で、文明八年（一四七六）五月以前成立。一条兼良序。竹林の七賢になぞらえ、宗祇の連歌の先達であった宗砌・智蘊・心敬・専順・能阿・行助・賢盛の七人の付句と発句を集める。所収句数は、心敬四〇一句が最も多く、次いで宗砌三五三句、専順三三〇句が中心に据えられているところに、宗祇の意図が窺える。明応四年（一四九五）の『新撰菟玖波集』の重要な撰集資料となった。

『竹林集聞書』は、『竹林抄』のうち、付句三三〇句、発句四四句を抄出し、注釈を加えたもので、作者は未詳である。はじめに連歌の由来を述べた序があり、以下の注釈の内容は宗祇作と伝える『竹林抄之注』に近接する。裏表紙の見返し右隅に「霜さゆる山田の原の村薄^{すさ}かる人なしに残る比^ひ哉」の一首が書き留められている。本書の翻刻は、貴重古典籍叢刊にある。（H）

〔15〕竹林集聞書

1冊 写本 [江戸時代前期]写
四つ目袋綴 海老茶色渋引表紙
本文料紙：楮紙 14.7×19.9cm
無境界 半面11行内外 首題：竹林 標題は前一条関白撰政 叙による 背に「雨夜記」とあり

文 国文学[Ge]4[貴] (447662)

“Chikurin-shu Kikigaki”

Commentary of renga-style poems.

Hand-written. Edo period.

宗祇とその門弟

宗砌、心敬、専順の三人に師事して、その異なる作風を統一止揚したのが宗祇である。宗祇の生国出自には諸説あるが、はっきりしたことはわからない。三〇歳頃から連歌に専念し、数多くの独吟を詠んで修行を積むとともに、東常縁とうのつねより、一条兼良、三条西実隆ら当代一流の文化人と交わり、連歌界の第一人者の地位に至る。当時は、応仁の乱により、戦国大名たちは領国に引き揚げていたが、宗祇は彼らの招きに応じて各地を旅し、地方の連歌を指導した。

そのような中で『新撰菟玖波集』の編集が企画され、宗祇と兼載かねぞうが中心になって進められ、勅撰に准ぜられた。この他、宗祇は連歌論として『吾妻問答』『老のすさみ』など数多く成しているが、その功績は連歌のみに留まらず、源氏物語、古今集、伊勢物語などの古典の講釈においても力量を発揮した。

宗祇の門弟のうち、高弟肖柏・宗長は、宗祇と三人で製作した名高い「水無瀬三吟百韻」「湯山三吟百韻」を残している。晩年の門弟に宗碩そうせきがいる。

〔二六〕三島千句

宗祇の独吟千句。文明三年（二四七二）三月二四日から二六日の三日間で成る。（日付は柿衛文庫本に拠ったが、諸説ある。）第一百韻の発句は「なべて世の風をおさめよ神の春」。この千句には、宗祇自身による数種の跋文が残されている。最も詳しい跋文を備える本書は、伊豆三島の東常縁のもとで古今伝授（初度）を受けていた宗祇が、常縁の子息竹一丸が風邪を患った際、発句をもつて三嶋明神に立願したところ平癒したため、報賽の千句を独吟・奉納したと記す。この千句には、古河公方を迎え撃つ常縁のための先勝祈願が込められているという見解もある。

翻刻は、古典文庫459等があり、江藤保定『宗祇の研究』の翻刻には、本書が校合本として使用されている。なお、実隆注かと言われる加注本（金子金治郎『連歌古注釈の研究』に翻刻）もある。（H）

〔16〕三島千句

1冊 写本 宗祇作 [室町時代末期頃]写 四つ目袋綴 紗綾形文地牡丹唐草空押練色表紙 本文料紙：椿紙（一部斐混りか）14.4×20.0cm 無辺界 半面14行 扉題：みしま千句 首題：於伊豆三嶋宗祇獨吟 標題は打付書外題による 初葉首題脇に墨書：「浄教房 真如藏」

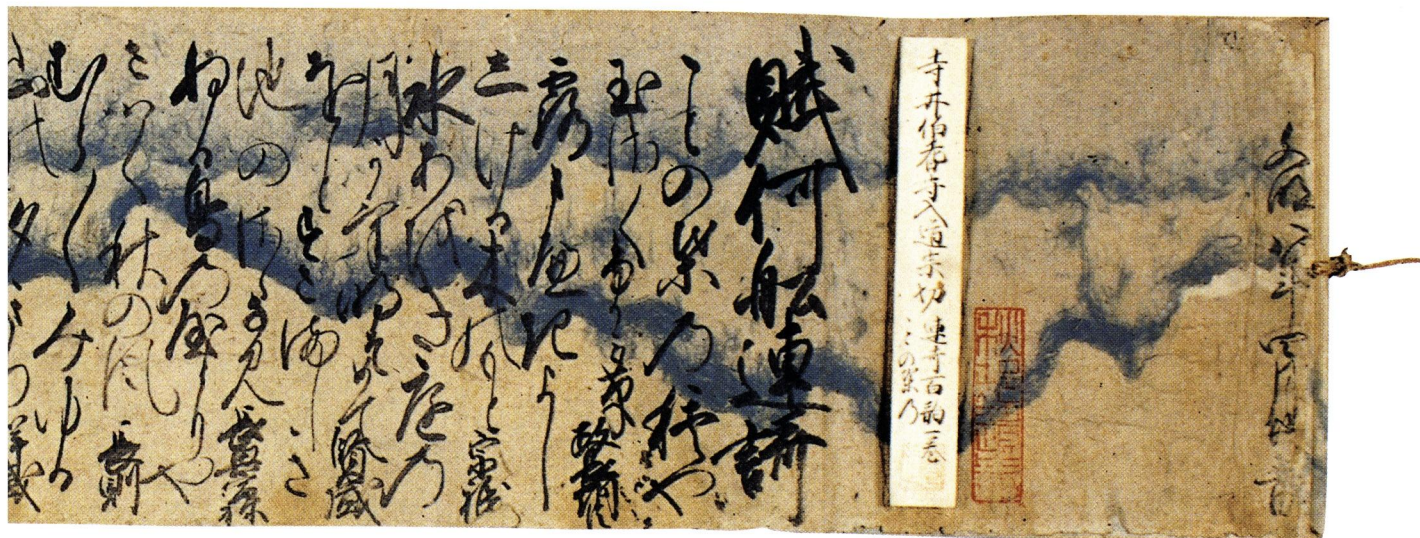
文 國文學I GJ 6 貴 (447662)

“Mishima Senku”

Renga-style poems dedicated to the gods by Sogi.

Album. Hand-written.

Edo period.



〔17〕賦何船連歌

〔二七〕 賦何船連歌

文明八年（一四七六）四月三日興行。

発句「ことの葉の種や玉さくふかみ草 政長朝臣」

脇「露さへきよししげる木のもと 宗祇」

第三「水あをき庭の月かげ明そめて 賢盛」

連衆と出句数は、政長五、宗祇五五、賢盛六、長興宿禰五、長則三、祥盛

五、国久三、周木四、栄阿四、賢林一、世縁四、盛春三、立阿一、木阿一。

発句は、宗祇の草庵「種玉庵」を詠み込んでいることから、草庵開きの会であつたと指摘されている。入江御所の南（西洞院正親町）^{おおぎまち}に新造した草庵に、管領畠山政長、先輩賢盛らを招いての張行である。「種玉」は、『搜神記』の故事に基づくと言われる。

なお、この百韻は、二折までの五〇句で打ちきられており、残りの五〇句は宗祇独吟で満尾している。本書が唯一の伝本である。懷紙を卷子に改装したもので、江藤保定『宗祇の研究』（本書の翻刻あり）は宗祇自筆とする。（H）

〔17〕 賦何船連歌

1軸 写本 政長ほか作 [室町時代]写 卷子 打雲表紙 本文料紙：打雲格紙 15.9cm 無辺界 墨書貼札：「寺井伯耆守入道宗切」

「連歌百韻一卷／ことの葉の（養／心）（朱文印）」

附図 谷村文庫・猪14-24/3貴 (763489)

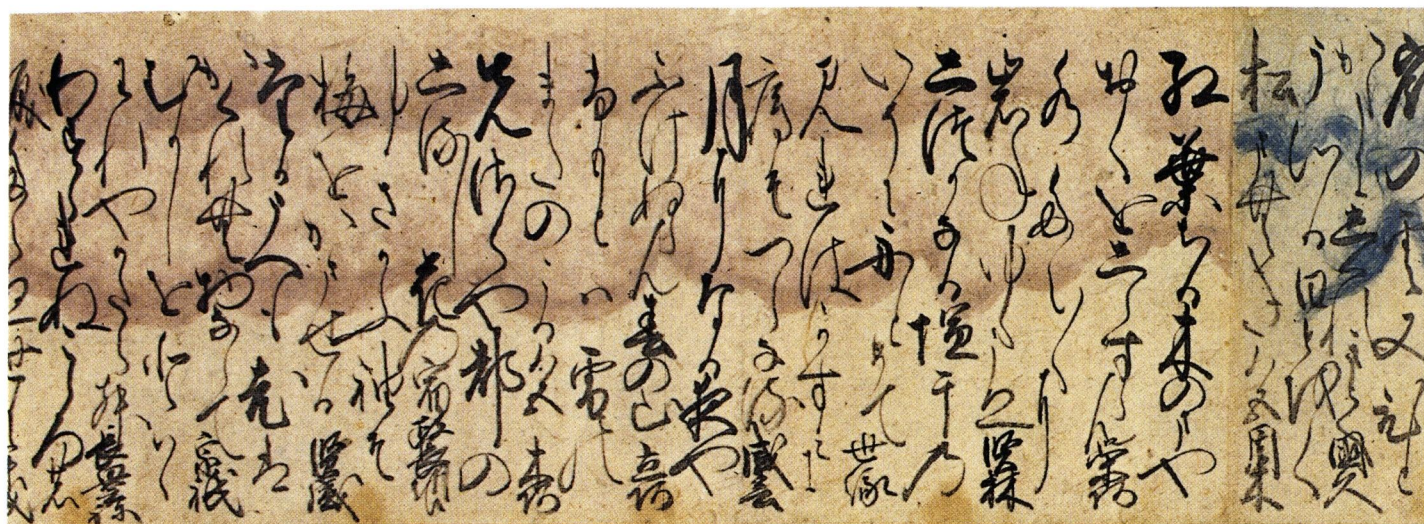
“Husu Nanifune Renga”

Renga-style poems by Seicho... et al.

Handscroll. Hand-written.

Muromachi period.

Tanimura, Inawashiro collection.



〔二八〕 伊宗両吟百韻

『湯山両吟』『有馬両吟』と称される宗伊（賢盛）・宗祇の両吟何路百韻に宗祇自ら注を施したものである。

文明一四年（一四八二）正月頃、宗祇は摂津に下向し、二月二日池田若狭守正種の亭で肖柏・宗伊らとともに連歌をし、五日有馬に移りこの百韻を巻いている。

発句「鶯は霧にむせびて山もなし 宗伊」

脇「梅かほるの、霜寒き比 宗祇」

宗伊は、俗名杉原賢盛、足利義政の近習。『竹林抄』の七賢の一人で、この時六五歳、宗祇は六二歳であった。

古注には、宗祇自注の他、西順補注がある。自注本系統の金沢市立図書館本（翻刻は『中世文芸叢書』（広島中世文芸研究会）1、金子金治郎『宗祇名作百韻注釈』）と本書（島津忠夫『連歌集』に翻刻）とは本文及び注文に若干の相違がある。なお、本書には第二丁と第五丁とに錯簡があり、最終丁には定家らの和歌が書き留められている。（H）

〔18〕 伊宗両吟百韻

1冊 写本 宗伊、宗祇作 [室町時代末頃]写 四つ目袋綴 茶色表紙 本文料紙：楮紙 21.1×18.8cm 無辺界 半面14行 内題なし、標題は書題簃による 奥書：「永享十二申年春興行<宗伊/宗祇>両吟百韻了」

附図 4-24 頁11 (8990)

"I-So Ryogin"

Renga-style poems with notes by Soi and Sogi.

Album. Hand-written.

Muromachi period.



〔一九〕 賦何人連歌

延徳二年（一四九〇）三月八日興行。

発句「九重の外山も花の雲井かな 宗祇」

脇「さくらにとをきあけほの、色 賢仲」

第三「残てや月も春の夜おしむらん 肖柏」

連衆と出句数は、宗祇一五、賢仲一二、肖柏一四、兼載一四、玄清一一、宗長一三、惠俊八、宗作一一、派一一、賢久一。

賢仲…寺井伯耆守。若狭国武田氏被官の武士。宗巧と号した。

玄清…宗祇門。俗名は肥田（河田）兵庫助春仲。三条西実隆、近衛尚通に古典を学び、『新撰菟玖波集』に七句入集。種玉庵の傍らに庵を結び、宗祇離

京中は留守を守った。

惠俊…『新撰菟玖波集』に三句入集、『連歌寄合』の編者。宗祇門ではないと

考えられているが、同座した百韻は多い。

宗作…宗祇門弟の中でも宗長に次ぐ古参で、宗祇の『筑紫道記』の旅に同行している。

宗祇とその高弟らが集合したこの百韻には、本書（『宗祇の研究』に翻刻）の他六本の諸本が伝わる。懷紙を卷子に仕立てている。（H）

〔19〕 賦何人連歌
1 軸 写本 宗祇ほか作 [室町時代]写 卷子 打雲に梅々枝表紙 本文料紙：打雲格紙 見返：銀泥に金銀切箔ちらし紙 17.4cm 無境界
附図 谷村文庫・猪14-241カ4（763487）
“Husu Nanihito Renga”
Renga-style poems by Sogi...et al.
Handscroll. Hand-written.
Muromachi period.
Tanimura, Inawashiro collection.

〔二〇〕 賦山何連歌

明応九年（一五〇〇）四月九日興行。

発句「郭公またれんとする初音哉 慶千世丸」
はつとこまたれんとする

脇「卯の花月のくれいそぐかげ 宗祇」

第三「しげみより木のした露のほのみえて 兼載」

連衆と出句数は、慶千世丸五、宗祇十七、兼載一、玄清一四、宗仲一三、

宗坡一二、宗碩一二、匡久一〇、正運一〇、鶴松丸一、周安五。

慶千世丸…専順の孫、後の専芸である。この時わずか二三歳で、発句の「初音」から、慶千代丸の披露目の会であったと推測される。宗祇一門は専順の子

孫を盛り立てようとしていたようだが、この専芸は二三歳で夭折（ようせつ）してしまう。

宗仲、宗坡…『新撰菟玖波集』編集作業にも携わった宗祇の門弟。宗仲が『新撰菟玖波集』に一句入集しているのに対し、宗坡は未だ若年と見え入集していない。

宗碩…宗祇晩年の愛弟子で、宗祇没後は種玉庵を継ぐ。三条西実隆、近衛尚通に親炙（しんし）し、古典を学んだ。

本書は『宗祇の研究』の翻刻に校合本として使用されている。（H）

〔20〕 賦山何連歌

1冊 写本 慶千代丸ほか作
[室町時代]写 四つ目袋綴 江戸
茶色表紙 本文料紙：楮紙 打付
書外題：百韻 23.1×18.3cm 無
辺界 半面10行 蔵書印：「青
蓮/院藏」(朱文、印主：青蓮院)
附図 谷村文庫I4-24I15・責 (1939980)

“Husu Yamanani Renga”

Renga-style poems by
Keichiyomaru...et al.
Album. Hand-written.
Muromachi period.
Tanimura collection

〔二一〕 萱草

宗祇の第一自選句集。巻頭は「月の秋はなの春たつあしたかな」で、発句

の部は立てず、四季の各部のはじめに収録する構成になっている。関東下向中の句を中心に、発句二百余、付句七百余を収める。著名な発句「世にふるはさらに時雨のやどり哉」も、ここに収録されている。

成立年次は明らかではないが、本書を青蓮院准后尊応が清書した旨を記す文明六年（一四七四）の奥書がある。この奥書の執筆者は、足利義政に擬せられてきたが、島津忠夫氏は、谷村本（本書）の奥書の「北麓野叟」（やせう）こそが執筆者であると見なし、その人物を尊応の兄二条持通に比定している。

本書は早稲田大学図書館蔵本（影印『早稲田大学蔵資料影印叢書』20）同様、清書本系統に属し、本文も早稲田本に近い善本で、室町時代の古写であるが、若干の落丁がある。諸本の研究は、両角倉一「宗祇句集『萱草』本文考」（『山梨県立女子短期大学紀要』8）に詳しく、翻刻は古典文庫40、群書類従17下にある。（H）

〔21〕 萱草

6巻1冊 写本 宗祇作 [室町時代]写 大和綴 網目地鶯茶色布表紙 見返：金銀切箔ちらし紙 本文料紙：斐紙（楮入か） 22.4×17.4cm 無辺界 半面11行 奥書：「此一帖者連歌好士宗祇以自句／編集之詔青蓮院准后加／清書於外題宗祇依所望染／禿筆者也／于時文明六年夾鍾下濤書之」、「此一冊彼好士依懇望難默止／加愚筆之處式部卿宮披讀之次、録右奥書行而已」、「于時文明第六開蓬敦牂／歲沽洗下一作龍？之／北麓野叟」附図 谷村文庫I4-24I71 (763393)

“Wasuregusa”

Renga-style poems by Sogi.
Album. Hand-written.
Muromachi period.
Tanimura collection.

(二二) 春夢草

肖柏の自撰句集。肖柏は中院通淳^{みちあたつ}の息だが、早く出家した。宗祇に師事し、古今伝授を受け、古典の講釈を聴聞、『弄花抄^{ろうか}』『伊勢物語肖柏抄』などをまとめた。摂津池田に「夢庵」を結び、活動の拠点としたが、晩年は堺に移住し、いわゆる堺伝授を相伝した。

『春夢草』には発句集、付句集、発句及び付句集があるが、本書は発句のみ。奥書には「永正一二年三月中旬」とするもの以下数種あり、所収句も、諸本により異なる。本書は「空の色に霞もしるやけふのはる」以下四四一句を収め、発句集諸本の中で最も句数の多い系統に属する。奥書には、永正一二年（二五一五）夏とあるが、所収句に永正一三年三月の十花千句の発句が見られるなど不審な点もある。肖柏は永正一二年には七二歳で、自筆とされる奥書には老筆のためのふるえが見られる。

本書の影印は、貴重文献集成8にある。なお、付句集、発句及び付句集には加注本もあり、金子金治郎『連歌古注釈集』、桂宮本叢書19に翻刻されている。

(H)

[22] 春夢草

1冊 写本 夢庵居士(肖柏)作
永正12年(1515)写 大和綴 桐瓢
筆模様鶯茶色布表紙 見返:金箔
置紙に金銀切箔ちらし草木描絵模
様 本文料紙:斐紙 24.6×17.3
cm 無辺界 半面8行 奥書:
「永正十二年夏之間録之/夢庵居
士(花押)」

附図 4-24 1/4頁 (57992)

"Syunmuso"

Renga-style poems by Shohaku.
Album. Hand-written.
Muromachi period, dated 1515.

(二三) 園塵

兼載の自選句集。兼載は会津の出身で猪苗代氏。若くして心敬に師事し、その詩藻を受け継ぐ。心敬没後宗祇の庇護を受けたが、『新撰克玖波集』撰進に際して対立することもあった。宗祇の跡を受け、北野会会所奉行に就任している。後に仙台伊達家のお抱え連歌師となった猪苗代家の祖である。

『園塵』は年代順に第一から第四までの四巻が存するが、本書はその第一に相当する。第一の諸本は伊地知鉄男氏により、続類従本(続群書類従17下)を基準として、それより句数の多い第一種本、さらに多い第二種本に分類されており、本書は第一種本に属する。本書の本文を続類従本と比較すると、句の出入りの他、書写の段階で生じたものとは見なしがたい句形の相違も見られるところから、諸本は兼載による再編の過程を示すものと推測される。(H)

[23] 園塵

上巻1冊 写本 兼載作 文禄2
年(1593)写 大和綴 檜皮色渋引
表紙 本文料紙:楮紙(斐混りか)
21.7×17.0cm 無辺界 半面9行
初葉首題脇に墨書:「山門東塔南
谷浄教房 真如藏 二百廿六福」 奥
書:「右一帖於北野會所被書注畢」,
「明應三年九月十六日」,「永禄十
三年八月十三日」,「文禄貳年
<癸巳>三月五日写之」

文 國文學!Ggl3頁 (447652)

"Sono no Chiri"

Renga-style poems by Kenzai.
Album. Hand-written.
Azuchi-Momoyama period,
dated 1593.

〔二四〕連歌ノ事

本書には外題、内題はないが、『長六文』『当世連歌嫌詞』『吾妻問答』を順に合冊したものである。『長六文』『吾妻問答』はともに宗祇の代表的な連歌論書。場所を同じくして相次いで成ったこの二書は合冊されることが多い。

『長六文』（連歌論集2に翻刻）の書名は、長尾孫六に宛てた書簡の形態をとっていることから、後に付けられたもの。文正元年（一四六〇）、東国に向した宗祇は、秋に武蔵国に入り、九月尽の連歌会で初めて長尾氏と一座し、一〇月には五十子陣所において『長六文』を書きあげた。翌文正二年三月には武蔵国角田河原付近で『吾妻問答』を執筆した。『吾妻問答』諸本には「長尾弥四郎殿江」と記すものがあり、やはり長尾氏の一族に与えられたことがわかる。跋文には、この辺りの若い人々は、京で見る人々よりも連歌に志が深いようだとあり、彼らの熱意に心を動かされてこの二書は成ったのである。

『吾妻問答』（日本古典文学大系『連歌論集 俳論集』に翻刻）の書名は、同じく問答体で書かれた二条良基の『筑波問答』になぞらえて後代につけられたもので、宗祇在世中には『すみだ川』と呼ばれていた。内容は『長六文』が付録や本歌の取り方、多義語の解説など技術的な指導を中心とするのに対し、『吾妻問答』は、それらに加え、連歌の時代区分、稽古の仕方、当座の心得等にも及び、より体系的な連歌論になっている。（H）

〔24〕〔連歌ノ事〕

1冊 写本 宗祇作 [江戸時代初期か]写 四つ目袋綴 藍色紗綾形文地牡丹唐草空押表紙 本文料紙：楮紙 22.9×15.8cm 無辺界 半面7行 内外題なし 奥書：「天正十九年二月上旬写之矢田寺舜良」

附図 平松本第7門レ15 (147193)

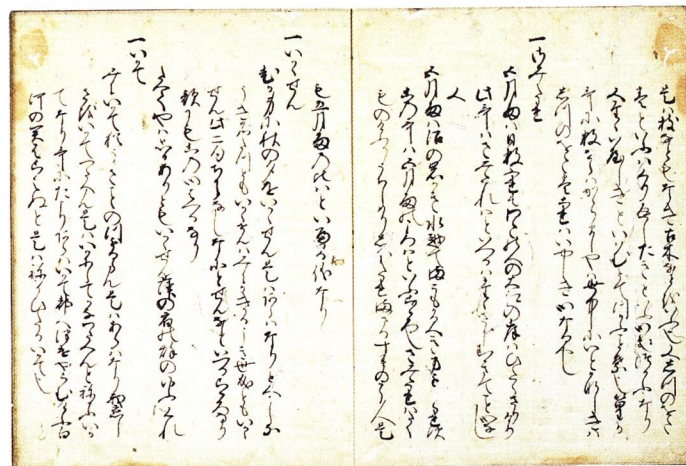
“Renga no koto”

Critical view of renga-style poems

by Sogi.

Hand-written. Edo period.

Hiramatsu collection.



〔25〕分葉

1冊 写本 宗祇著 [室町時代] 平(西洞院)時慶写 四つ目袋綴 黄檀色表紙 本文料紙：楮紙 25.0×20.2cm 無辺界 半面12行 内題なし、標題は打付書外題による 奥書：「天正十八年八月十九日以書写本一校了」前見返紙内側に「平時慶」の墨書あり 長享2年(1488)・宗祇から相良殿宛

附図 平松本第7門フ3 (147411)

“Bun'yo”

Critical view of renga-style poems by Sogi.

Hand-written. Muromachi period.

Hiramatsu collection.

〔二五〕分葉

宗祇著と伝える連歌学書。長享二年（一四八八）三月蒲生貞秀に与えたものが第一次成立本か。一語で複数の意味を持つ言葉を取りあげ、和歌、まれに連歌を引いて解説する。

諸本は三系統に分けられ、甲本は「すさむ」以下二八語を収め、乙本はその後に、本歌の取様、『源氏物語』の取様、前句のさばき方などの解説を付す。丙本は「すさむ」以下九五語を収める。このうち、本書は乙本の系統に属する。刊本には、古活字本『分葉抄』と宝暦五年（一七五五）序の版本『歌林山かげら』がある。翻刻は連歌論集3にある。（H）

〔二六〕 連歌作例

〔26〕 連歌作例

1冊 写本 永禄11年(1568)写
四つ目横帳 丁子茶色表紙 本文
料紙：楮紙 14.8×20.0cm 無辺
界 半面不同行 内題なし、標題
は後補書題簽による 末尾に「に
てと、むるてにはの事」という一
文を付す 奥書：「永禄十一年戊
辰七月日」 初丁上部に墨書：「山
門東塔南谷浄教房 真如藏 二百廿
八善」

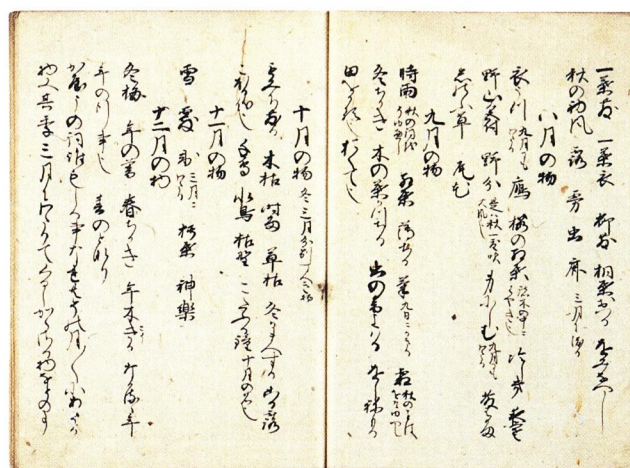
文 国文学[Gb]10b貴(447662)

“Renga no Sakurei”

Learned book of renga-style poem
by Socho.

Hand-written. Muromachi period,
dated 1568.

連歌の付様について「ぞと云にあたりて付る」付け方など、様々に分析し、
例句を挙げながら示す。伝本は、永禄十一年(一五六八)の奥書を持つ本書
(永禄本)と、永正九年(一五二二)の奥書を持つ京大文学部国文研究室蔵の
一本(永正本)のみである。永正本は永禄本を増補したものと考えられる。
本書の作者・成立事情について語る序文には、「連歌の作例」について、志
の深い人々が集まり、先達から聞き置いたことを「雨夜のながき」に語り合っ
たものを書きとどめたのだ、とある。宗長作とされる『雨夜の記』の諸本は、
これとほぼ同文の序を備え、永禄本の例句のほとんどを有することから、永禄
本『連歌作例』を増補改編したものと言える。しかし、『雨夜の記』宗長作説
には疑問が呈されており、『連歌作例』の作者も未詳とせざるを得ない。
古典文庫517に本書と永禄本の翻刻がある。(H)



〔27〕 初学抄

1冊 写本 天正1年(1590)、
右兵衛佐平(西洞院時慶)写 四
つ目袋綴 素紙共表紙 本文料
紙：楮紙 内題なし、標題は打
付書外題による 23.4×18.0cm
無辺界 半面10行 奥書：「右
兵衛佐平(花押)」 裏表紙に墨
書：「天正十八年二月吉日書写之」
附図 平松本[第7門]シ28 (147140)

“Shogakusho”

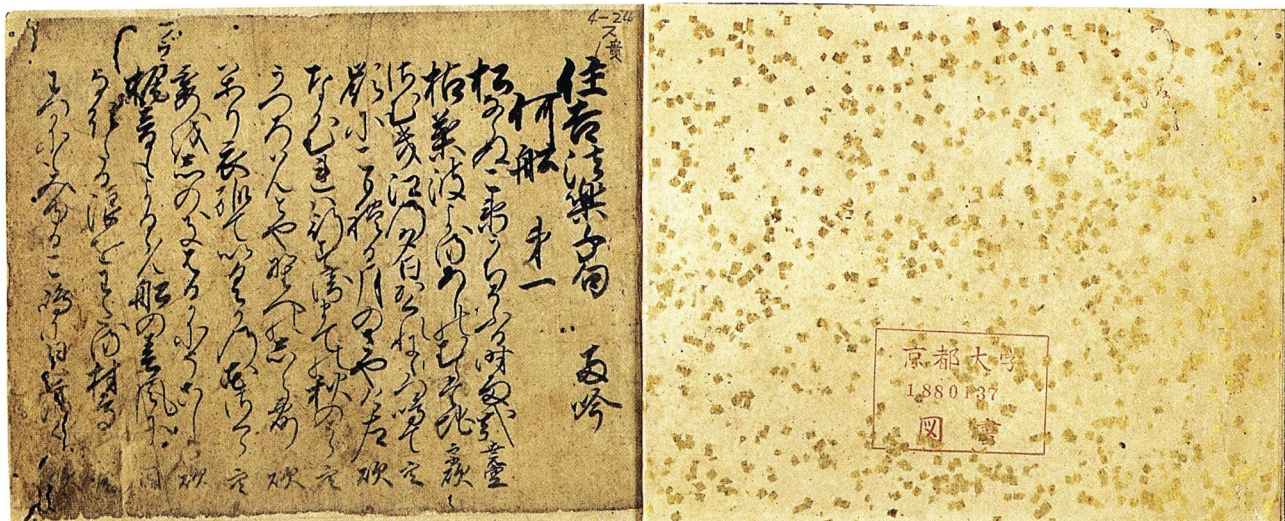
Critical view of renga-style
poems.

Hand-written.
Azuchi-Momoyama
period, dated 1590.
Hiramatsu collection.

〔二七〕 初学抄

表題は諸本により『宗祇初学抄』
『連歌初学抄』等さまざまであるが、
現在は『初学用捨抄』の名称が一
般的に用いられている。永正一五
年(一五一八)写本の存在から、
それ以前の成立。

内容は、まず一二ヶ月の各月ご
とに、時節相応の景物を列挙し、
次に再び各月ごとの本意を、歌を
引用しつつ解説する。後半は、初
心者に対し、連歌の座における注
意などを説く。後世紹巴が宗祇の
著作と見なして大いに推奨した、
初心者向けの懇切な書であるが、
宗祇作とする確証はない。むしろ
心敬流の連歌師の手になるのでは
ないかという説も提出されている。
本書は、木藤才藏氏の分類によ
れば、第三類本に属する。連歌論
集2の翻刻に校合本として用いら
れている。(H)



〔二八〕住吉法楽千句

大永元年（一五二二）十一月一日から四日にかけて、

宗碩が願主となつてその草庵で興行された千句。撰津住吉社に奉納したのであるが、宗碩の張行目的はわからない。

第一百韻発句「松ならぬ声打そふる時雨かな 実隆」

第二百韻発句「さ夜時雨空も干ぬまの朝日哉 宗碩」

追加には、宗牧、永閑、周桂らが詠んでいる。『実隆公記』には、この千句に関する記載があるが、実隆は、「此会席無為自愛々々」と感想を述べ、懐紙を御所に進上したことなどを記している。諸本は多く、この他に一二種ある。

(H)

〔28〕住吉法楽千句 両吟

1冊 写本 堯空(三條西実隆)、宗碩作 [室町時代]写
三つ目袋綴 松葉色地寿字模様布表紙 本文料紙：楮紙
見返料紙：金切箔ちらし斐紙 14.3×19.5cm 無辺界 半面
13行 後補書題簽：住吉法楽連歌

附図 4-24 ス1別貴 (1880137)

“Sumiyoshi Horaku Senku”

Renga-style poems dedicated to the gods by Gyoku and Soseki.

Hand-written.

Muromachi period.

〔二九〕連歌 天正八年（伊勢千句注）

『伊勢千句』の注釈書。伊勢千句は、大永二年（一五二二）八月四日から八日の間に、伊勢山田にて宗長、宗碩らの両吟に成り、伊勢神宮に奉納された。巻頭百韻の発句は管領細川高国、巻軸の発句は三条西実隆に請うている。

この三年前、都を追われ近江に退いていた高国が政権を奪回した際、かつて高国の恩を受けた宗長は、神宮立願として独吟の千句を思い立ったが、高齢のため（宗長は千句当時七五歳）果たせず、同門の宗碩（四九歳）を誘ってようやく成就した（宗長『宗長手記』宗碩『さののわたり』）。高国の発句「朝日影四方に匂へる霞哉」は宗長の代作、とも伝えられ、高国の天下到来を祝し、太平の世を願う思いが込められている。

この伊勢千句には数多くの古注釈が伝わるが、本書は、金子金治郎氏によれば第七種注に属する。第四百韻から第七百韻までの断簡で、錯簡落丁の結果都合七二句が欠落している。元表紙裏に天正八年、九年の紹巴らの句が記されていることから、その頃の書写と思われる。「私」の書き入れや、「竹」「了」「梅」と記す朱の書き入れがある。『連歌古注釈の研究』に別種注の翻刻がある。（H）

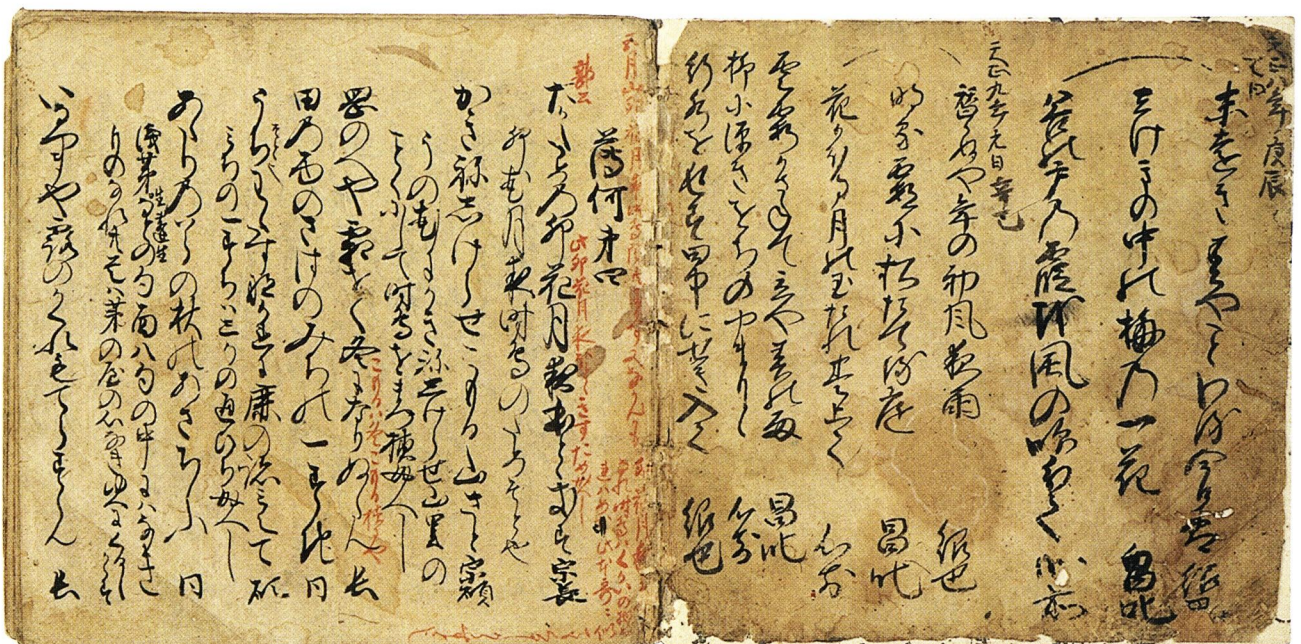
〔29〕連歌 天正八年（伊勢千句注）

1冊 写本 宗長、宗碩作 [室町時代]写 大和綴包背装 生成地金銀切箔ちらし表紙 本文料紙：斐紙 15.0×15.4cm 無境界 半面13行 内題なし、標題は後補 表紙打付書外題による 先頭に紹巴、昌叱、心前の句半葉を付す 附図 谷村文庫14-24レ15貴 (91000004)

"Ise Senku-chu"

Renga-style poems with notes dedicated to the gods by Socho and Soseki.

Hand-written. Muromachi period. Tanimura collection



〔三二〕 湯山聯句抄

鹿苑院主を退いた景徐周麟が、明応九年（一五〇〇）東福寺の僧寿春妙永^{じゆしゆんみよえい}をさそって摂津国有馬温泉に湯治に行った際、徒然を慰めるために行った十韻一千句（京大本は六句欠）の聯句に、永正元年（一五〇四）、一韓智翽^{いっかんちこう}が注を付した抄物。現存する写本は京大本のほか東福寺霊雲院蔵本のみである。書写年代は文禄三年（一五九四）、書写者は不明。九九丁から一〇五丁までは前の部分と同筆であるが京大本独自の本文であり、「一韓ハ杜カ詩トラウセラル、カ」などに見えることから、後人の増補と考えられている。京都大学国語国文学資料叢書12に影印が、新日本古典文学大系53に翻刻が収められ、それぞれ解説を付す。

短連歌から百韻を定型とする長連歌への変化に際しては、聯句の与えた影響が大きかったとされる。（N）

〔31〕 湯山聯句鈔

1冊 写本 【寿春】妙永、景徐周麟撰、〔一韓注〕 文禄3年(1594)写 四つ目袋綴 打雲表紙 本文料紙：楮紙 26.8×19.5cm 無辺界 半面13行 標題は打付書外題による 湯山聯句序：妙永書 蔵書印：「大仙寺」(朱文、印主：大仙寺) 書写奥書：「文禄三年五月下旬四日」

附図 谷村文庫14-071ト1頁(763376)

“Yunoyama Rengu-sho”

Chinese-style linked verse with notes in Japanese by Jushun Myoei and Keijo Shurin, annotated by Ikkan.

Muromachi period, dated 1594.

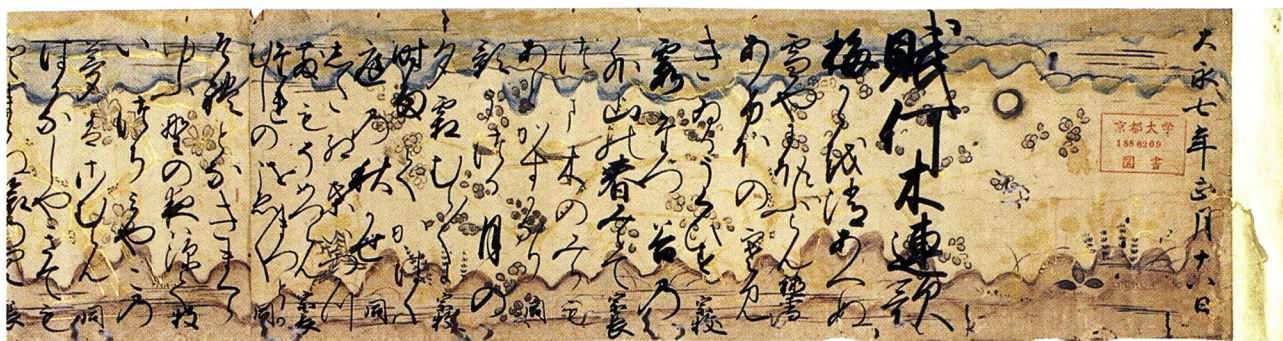
Tanimura collection.

宗牧から紹巴

宗長、宗碩に師事し、その没後は連歌界の第一人者となったのが宗牧である。三条西実隆、近衛尚通に古典を学び、近衛家とは特に親しかったようである。天文三年（一五四四）から『東国紀行』の旅に出たが、下野国佐野の地で客死。古今伝授の箱に添えて、遺子宗養の後見を頼む和歌を近衛植家たねいえに送っている。

二〇歳で父に死別した宗養は、多くの武将と親交を結んだが、中でも三好長慶とは親しく『飯盛千句』などの作品が残っている。宗養は、その才を惜しまれつつ三八歳の若さで亡くなったため、宗牧、宗養の系譜は途絶えてしまう。

替わって織豊期の連歌壇を支配したのが紹巴である。紹巴は周桂、昌休に師事し、昌休の遺志によりその子昌叱を養育。その後自らの娘を昌叱に嫁がせ、連歌の家である里村家の基盤を作った。この時代には、連歌は一層広く享受され、『匠材集』『無言抄』『随葉集』など近世にも流布した連歌書が出版されている。



〔三二〕 賦何木連歌

この百韻は一般に『矢島小林庵百韻』と呼ばれている。宗長・宗牧両吟。

大永七年（一五二七）一月一八日、宗牧は、実隆の発句「梅が、を消あへぬ雪やにほふらん」を携え、近江国矢島小林寺の旅宿に宗長を訪ね、一卷を成した。小林寺は、一休宗純開祖の酬恩庵の末寺で、八〇歳の宗長は、京都の騷擾を避け、一休ゆかりのこの寺で余生を送ろうとしていた。

脇「あけほの寒みきあるうぐひす 宗牧」

第三「霞たつ谷の外山の春見えて 宗長」

懷紙を卷子に仕立てたもの。

宗牧加注本があり、桂宮叢書18に翻刻されている。（H）

〔32〕 賦何木連歌

1軸 写本 宗牧、宗長作 [室町時代末期]写 卷子 丹表紙 本文料紙：打雲に草木等下絵斐紙 見返料紙：布目地金銀箔置紙 19.3cm 無辺界 発句のみ聴雪作

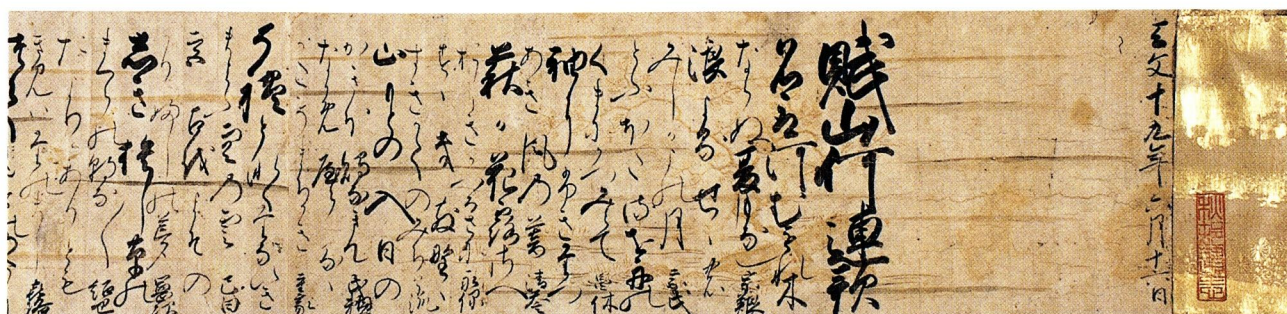
附図 4-24 フ1別貴（1886209）

“Husu Naniki Renga”

Renga-style poems by Soboku and Socho.

Handscroll. Hand-written.

Muromachi period.



〔三三〕 賦山何連歌

天文一九年（一五五〇）六月一六日興行。

発句「名取河むもれ木ならぬ夏もなし 宗養」

脇「浪よるせゝのみじかよの月 宗氏」

第三「とぶはたるを舟のくまにかつみえて 昌休」

連衆と出句数は、宗養一一、宗氏五、昌休一一、清蒼七、永侃八、了派八、

氏頼七、重家五、己白六、憲次四、紹巴六、喜緒六、元理八、能祐八、能哲一。

昌休・俗名里村弥次郎堯景。はじめ宗碩に師事したらしく、後に周桂、宗牧に

師事した。

宗氏・興行主と思われるが不詳。

清蒼…不断光院長老。近衛家との関わりが深かった。

元理…禅僧で、俳諧にも優れた。

能祐、能哲…北野社十川家。

懷紙を卷子に改装したもの。（H）

〔33〕 賦山何連歌

1 軸 写本 宗養ほか作 [室町時代末期] 写 卷子 松葉色宝相華唐草模様布表紙 本文料紙：草木下絵斐紙 見返料紙：金泥小花ちらし斐紙 17.3cm 無境界 箱書：「宗養筆一軸」

附図 谷村文庫・猪14・24サ14 (763490)

“Husu Yamanani Renga”

Renga-style poems by Soyo...et al. Handsroll. Hand-written. Muromachi period. Tanimura, Inawashiro collection.

〔三四〕 紹巴独吟千句

永祿六年（一五六三）一月一四日から一八日にかけて、称名院三条西公条きんえだの二七日追善のため、紹巴が独吟した千句とその注釈。この千句は『称名院追善千句』と呼ばれる。

三条西公条は、実隆の嗣子で、紹巴の古典学の師。紹巴はこの公条に親炙し、その死後も忌日に墓参りをすることを欠かさなかったという。第一百韻発句は「年としこの花ならぬ世のうらみかな」。この年一月に宗養が没し、紹巴時代の幕あけとなる千句で、紹巴の千句では最も流布し、版行もされた。

本書は金子金治郎氏の分類による第三種注、すなわち紹巴が成田泰親に与えた自注本である。第一百韻から第五百韻までのみの写本であるが、紹巴の弟子紹与の本を以て天正二〇年（一五九二）に書写したという、諸本の中でも比較的古い写本である。本文は広島大学蔵本（『連歌古注釈の研究』）と比べ小異がある。（H）

〔34〕 紹巴獨吟千句

1冊 写本 紹巴作および自注
天正20年(1592)写 仮袋綴 素紙
共表紙 本文料紙：楮紙 16.4×13.9cm 無辺界 每半面7行 内外題なし 奥書：「紹与之本書写畢」、「天正廿年辰小春下旬書之畢」 蔵書印：「をば／ま」(朱文、印主：小汀利得)

附図 4-24 ① 1貴 (1883083)

“Joha Dokugin Senku”

Renga-style poems by Joha as a memorial to Shomyoin.
Hand-written. Azuchi-Momoyama period, dated 1592.

〔三五〕 称名院追善千句

〔三四〕参照。本書は、自注本成立前の天正三年（一五七五）に行われた、紹巴による千句の講釈を、門人素丹が筆録した、第一種注である。従来第一種注本は、金子氏により、書陵部蔵の第三種注に、朱筆書き入れとしてのみ伝存する孤本とされてきた。しかし、本書は、素丹による序文と跋文を備え、紹巴自注に続けて「素丹聞書」「丹聞」「丹」として素丹の聞書注を付す、完全なる第一種注本である。

序文には、この千句には「禁の詞」はない、上手であれば「禁の詞」を使ひこなすこともできるが下手はその真似をしてはいけない、という紹巴の他の連歌論書にも見られる考え方が示されており、この千句に対する紹巴の姿勢が窺われる。

素丹の聞書注は、自注本に説明のない句に対しても注を付し、内容も非常に懇切なもので、本千句の理解に欠かせない資料であると言える。（H）

〔35〕 称名院追善千句

1冊 写本 紹巴作および自注、素丹注 慶長16年(1611)写 横帳 渋引黒色表紙 本文料紙：楮紙 17.1×22.8cm 無辺界 半面13行 首題なし、標題は扉(元表紙)による 後補書題簽の書名：称名院追善千句注 奥書：「為稱名院殿前右大臣入道／公條公三条西殿御追善／綴之畢／紹巴御自筆之本奥書かくのこし」、「此千句は…(略)紹巴(在ノ判)」、「天正三乙亥年…／天正十五年…素丹」、「慶長十六年六月上旬書写畢／常信。」 蔵書印：「をば／ま」(朱文、印主：小汀利得)

附図 4-24 ② 2貴 (1886212)

“Shomyoin Tsuizen Senku”

Renga-style poems by Joha as a memorial to Shomyoin.
Hand-written.
Azuchi-Momoyama period, dated 1611.

〔三六〕 賦何木連歌

天正一九年（一五九二）九月二五日興行。

発句「おのゝえもくたしてやみん宿の菊 昌叱」

脇「山路わけいる庭の紅葉々 禪祐」

第三「月すめば鹿のなく音も遠からで 紹巴」

連衆と出句数は、昌叱一〇、禪祐七、紹巴一〇、永真六、玄仍九、紹与七、玄陽六、友益六、右運七、既在六、正繁五、了程五、景敏五、正益五、永由五、恕仙一。

脇を詠んでいる北野社妙藏院禪祐の張行で、紹巴の一門が多く出座している。

昌叱・昌休の息。一四歳で父に死別した後は、昌休の弟子であった紹巴のもとで修行した。紹巴との両吟に『毛利千句』がある。

玄仍・紹巴の長男。その評価は高かったようだが、三七歳で没する。父の追善に『玄仍七百韻』を詠んでいる。

景敏・昌琢の俗名。昌琢は昌叱の息で、母は紹巴の娘。玄仍の没後は、連歌界の第一人者となった。

友益・速水氏で、近衛家被官。紹巴とはよく同座している。

この他、紹与、正益は紹巴に師事している。既在も紹巴門か。懷紙を卷子に改装してある。（H）

〔36〕 賦何木連歌

1 軸 写本 昌叱ほか作 [江戸時代初期]写 卷子 紗綾形文地 菊花ちらし表紙 本文料紙：打雲 斐紙 見返料紙：金箔置紙 18.1 cm 無境界

附図 谷村文庫・猪14-24カ11 (763491)

“Husu Naniki Renga”

Renga-style poems by Shoshitu... et al.

Handscroll. Hand-written.

Early Edo period.

Tanimura, Inawashiro collection.

〔三七〕 匠材集

連歌辞書。慶長二年（一五九七）三月上旬、紹巴跋。跋文には編者来歴不詳のこの一冊を得たとあり、また本文中の「巴云」の注記などの徴証から、紹巴自身の作ではないと言われている。

連歌に用いる用語約四〇〇語をいろは順に並べ、「いきたなき ねこき事也／いやすく ねやすきなり／寝安とかく」などと簡潔な語釈を記し、式目に関して注記する箇所もある。原拠として『古今打聞』『源氏物語千鳥抄』『八雲御抄』『詞林三知抄』など一一種の歌学書、古注釈書が指摘されており、本文に少なからず存する誤脱を修正できる。

元和・寛永頃の古活字版が二種あるが、本書は川瀬一馬氏により、第一種本（ハ）種に分類されている。少々書き入れがあり、巻二を欠く。他に寛永三年（二六二六）、同一五年、慶安四年（二六五二）刊の整版本がある。影印は『連歌資料集3』（古活字第一種（イ）本、四巻のみ古活字第二種）、翻刻は日本古典全集『無言抄 匠材集』、両書の校異と注を付したものに、岡山大学資料叢書6―2がある。（H）

〔37〕 匠材集

3 冊（巻1、3、4） 刊本 古活字版 慶長2年（1597）跋刊 四つ目袋綴 雷文地菊花空押丹表紙 本文料紙：楮紙 14.4×20.5cm 無境界 半面13行 無題序、無題跋（慶長2年・紹巴）あり 蔵書印：「其中／堂印」（朱文、印主：其中堂）、「心／海」（朱文） 巻4 第52丁を欠き、第53丁は2葉あり

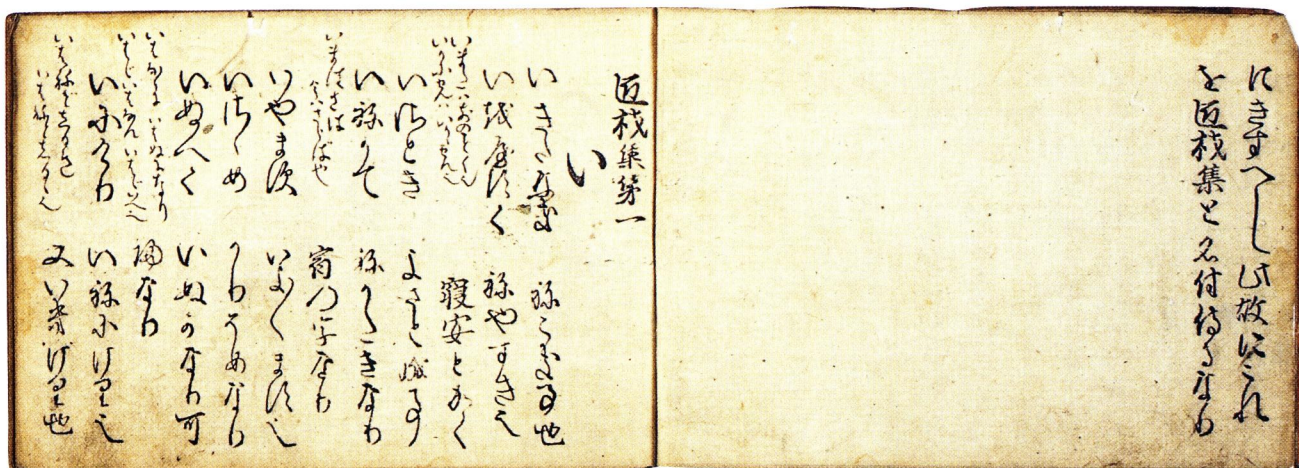
附図 4-24シ13頁（182753）

“Shozai-shu”

Wordbook for renga-style poems.

Old type version.

Edo period, dated 1597.



[38] 匠材集
4巻合綴1冊 刊本 古活字版 慶長2年(1597)跋刊 四つ目袋綴 雷文地菊花空押丹表紙 本文料紙：楮紙 13.8×20.4cm 無境界 半面14行 無題序、無題跋(慶長2年・紹巴)あり 前見返に巴水の墨書識語あり 蔵書印：「四山／亭藏」(朱文)、「宮／崎」(朱文)

附図 谷村文庫・猪4-24シ11 (763730)

“Shozai-shu”
Wordbook for renga-style poems by Joha.
Old type version.
Edo period, dated 1597.
Tanimura, Inawashiro collection.

〔三八〕匠材集

〔三七〕参照。古活字第二種本。第一種本と同じ頃の刊行と目されており、見出し語は、第一種本に比べ、やや大きく肉太の活字を使用している。

『連歌資料集3』に収められた古活字第二種本の影印と比較すると、別種であり、第二種本にも異種のあることがわかる。巴水の手沢本であり、本文の所々に巴水による書き入れがある。

(H)

〔三九〕無言抄

連歌式目辞書。応其編。自序、跋によれば、天正七年(一五七九)に起筆し、二年余で脱稿、紹巴の校閲を数回受けて改訂の末、慶長二年(一五九七)に清書が完成し、翌年紹巴の跋を得て、後陽成天皇の勅覧に与った。さらに二品親王空性の奥書を賜り、翌四年紹巴の奥書を付して刊行された。

慶長期に刊行された古活字版は三種に分類されている。そのうち慶長八年ごろ刊の古活字第一種(早稲田大学蔵本のみ)が定稿に近いと言われる。第二種、第三種本は、同じ底本に基づくと見られ、第一種本に比べると欠落が多い。本書は、上巻のみの第二種古活字版である。慶長一五年刊本は、後陽成天皇宸筆写刻の題簽を付し、古活字第一種本を製版・覆刻したものである。他に元和九年版以下数種の版本及び、近時発見された応其自筆奥書本などの写本がある。

内容は、式目濫觴・伊呂波詞・四季詞以下二五章から成り、当時の式目・去嫌などの規定を集大成したものである。広く流布し、近世の俳諧作法書にも影響を与えた。影印は『連歌資料集1』(古活字第二種)、『大方家所蔵 連歌資料集』(写本)があり、翻刻は、日本古典全集(元和九年刊本)がある。(H)

[39] 無言抄
1冊(上) 刊本 古活字版 [応其編] [江戸初期]刊 四つ目袋綴 焦茶色表紙 本文料紙：楮紙 27.1×20.5cm 無境界 半面11行 後補書題簽書名：誹諧無言抄 蔵書印：「丹宮津／醬油屋甚治／魚屋町」 内容：式目濫觴・伊呂波詞「四季詞」以下を欠く 附図 4-24ム11貴 (2592708)

“Mugonsho”
Rule book of renga-style poems by Ogo.
Edo period. Old type version.

江戸初期の連歌・俳諧の胎動

里村家は、昌叱の子孫の南家、紹巴の子玄仍の子孫の北家に分かれ、徳川將軍家のお抱え連歌師として代々奉仕し、權威とひきかえに創造性を失っていった。

一方、近世に入つて貞門、談林の俳諧が生まれるが、松永貞徳にしろ、西山宗因にしろ、里村家に入門した連歌師であつて、俳諧は余技に過ぎなかつた。その後、俳諧は次第に連歌を圧倒しはじめ、蕉門が全国的に拡がりを見せるに至つては、完全にその地位を奪つてしまう。

しかし、室町時代には俳諧は、連歌の歩みとともにあつたと言つてよく、『菟玖波集』には「俳諧」の小部立が立てられている。『新撰菟玖波集』には俳諧の作品は全く取られていないが、その四年後には俳諧の撰集『竹馬狂吟集』が編まれている。宗祇、兼載、とりわけ宗長は俳諧を好んだ。『俳諧連歌抄』（『犬筑波集』）を選んだ宗鑑も、宗長と接触があつたようである。「守武千句」を独吟した荒木田守武は、宗祇に師事して本格的に連歌を学んだ人で、宗長、宗碩ら連歌師とも交遊があつた。この守武流を受け継いだ伊勢俳諧は、重頼の『犬子集』に最も多く入集、宗因も守武流を標榜した。

〔四〇〕 賦何木連歌

慶長一六年（一六一一）三月二五日興行。

発句「もりとげよいにしへ今の花の種 杉」

脇「あふぐはる日の影にもれぬる 兼與」

第三「山もとのさとはかすかに明過て 春」

連衆と出句数は、杉一二、兼與九、春一〇、平宰相七、慶純八、紹由八、了俱六、意運七、禪昌九、正益八、圭種七、禪意七、堯政一。

杉…近衛信尹の連歌名。近衛家一七代。前久の息。三藐院と号す。

兼與…連歌の家である猪苗代家六代。五代兼如の次男。

春…近衛前久の連歌名。近衛家一六代。植家の息。

平宰相…西洞院時慶。

慶純…紹巴の門弟。

紹由…紹巴の門弟。

了俱…昌叱の門弟。

正益…兼如の弟で、七代兼也の父。

猪苗代家は兼如以来、仙台伊達家にお抱え連歌師として仕えたが、京の公家では特に近衛家とつながりを持ち、両家の連絡的役割も果たした。この百韻は、兼與が信尹から古今伝授を受けた折の披露の百韻で、発句は「古今」を詠み込んでいる。「寛永の三筆」と称せられた信尹が染筆した懷紙を、卷子に仕立てたもの。（H）

〔40〕 賦何木連歌

1 軸 写本 近衛信尹ほか作
[江戸時代初期、三藐院關白(近衛信尹)]写 卷子 雲鶴模様納戸色布表紙 本文料紙：斐紙 見返：金銀切箔置紙 18.6cm 無境界
箱書：「懷紙二通／三藐院關白御筆／内一通法橋兼与古今御傳授竟宴／内一通栗種斎正益古今御傳授竟宴」『賦千何連歌』（谷村文庫・猪4-24Ⅱセ1）と同箱
附図 谷村文庫・猪4-24Ⅱ力15（763486A）

“Husu Naniki Renga”
Renga-style poems by Konoe Nobutada...et al.
Handscroll. Hand-written.
Edo period.
Tanimura, Inawashiro collection.

〔四二〕 賦千何連歌

慶長一六年（一六一一）五月二九日興行。

発句「伝へうへむくさにしげることばかな 杉」

脇「はなたちばなの香をとむる宿 正益」

第三「郭公月をよすがに音信て 春」

連衆と句数は、杉一二、正益九、春一一、実顕朝臣九、冬隆七、長泰八、慶純十、紹由十、意運七、似運七、道青八、堯政一。

正益が信尹から古今伝授を受けた際の披露の百韻で、発句は古今仮名序にいう「六種」を詠み込む。連衆は、〔四〇〕の百韻と同じような顔ぶれである。

実顕…阿野実顕。

冬隆…滋野井季吉の初名。

信尹筆の懷紙を卷子に仕立てたもの。（H）

〔41〕 賦千何連歌

1 軸 写本 近衛信尹ほか作
[江戸時代初期、三藐院關白(近衛信尹)]写 卷子 亜麻色地鳳凰宝相華唐草布表紙 本文料紙：金銀泥下絵斐紙 見返料紙：布目地金箔置斐紙 18.5cm 無境界
箱書：「懷紙二通／三藐院關白御筆／内一通法橋兼与古今御傳授竟宴／内一通栗種斎正益古今御傳授竟宴」『賦何木連歌』（谷村文庫・猪4-24Ⅱ力15）と同箱
附図 谷村文庫・猪4-24Ⅱセ1（763486B）

“Husu Sen'nani Renga”
Renga-style poems by Konoe Nobutada...et al.
Handscroll. Hand-written.
Edo period.
Tanimura, Inawashiro collection.

〔四二〕 連歌伝授切紙

猪苗代家の祖兼載から二代兼純、四代宗悦、宗悦の息正益へと伝授されたとあるが、真偽のほどは定かではない。帙には「連歌伝授切紙」とあるが、実際には伊勢物語の切紙である「若紫」「草の上の露」「御神けきやう」「ひをりの日」の四通である。

松永貞徳の『載恩記』には伊勢物語切紙を七通とするが、その詳細は不明である。大津有一氏『伊勢物語古註釈の研究』に拠れば、叡山坂本辺の某寺蔵の伊勢物語口伝は、文政一二年（一八二八）に切紙五通を書写したもので、「春日野の若紫のすり衣」「月やあらぬ」「草のうへにをきたりける露」「御神けきやう」「右近馬場のひをりの日」の五箇条を挙げている由である。また、書陵部蔵伊勢物語切紙一冊の一二箇条の切紙のうちに「右近の馬場のひをりの日の事」「おほむ神けぎやう」の二条が含まれる由である。（H）

〔42〕 〔連歌伝授切紙〕

4通（8通の内） 写本 [江戸時代、正益]写 切紙 本文料紙：楮紙 17.9-18.4cm 無境界

1. 伊勢物語口傳（端裏書：若紫）
2. 草のうへにをきたりける露（端裏書：草乃上ノ露）
3. 御神けきやう
4. ひをりの日（首題なし、端裏書による）

附図 谷村文庫・猪4-241レ14 〈763522〉

Initiation letter on "Ise-monogatari".

4 sheets. Hand-written.

Edo period.

Tanimura, Inawashiro collection.

〔四三〕 漢和聯句

元和五年（一六一九）八月二三日、旧院（後陽成院）追善のため興行。第唱句「吟魂招以月 集雲」

入韻句「にしよりふくやはれ秋風 西洞院宰相」（韻「上平声一東」）

第三「色ながら山邊はあたら落葉して 新三位」

連衆と出句数は、集雲二五、宰相二五、新三位二五、友林二五。

集雲…東福寺の僧侶。

西洞院宰相…西洞院時慶。この時六八才。連歌は紹巴の指導を受け、歌人としても活躍した。なお写本で伝わる日記『時慶卿記』は、この年のものを欠く。

新三位…時慶の嫡子時直。三六才。

友林…高台寺の僧侶。

漢句を集雲と友林が、和句を時慶と時直が詠んでいる。

百韻の聯句は二つ折りにした懷紙四枚の表裏に記し、水引で綴じられる。伝本は京大に写本一本がある。（N）

〔43〕 漢和聯句

1帖 写本 集雲ほか作 [江戸時代]写 装飾懷紙 本文料紙：打雲斐紙 19.1×55.1cm（三折 19.1×19.0cm）無境界 半面21行内外

附図 平松本1第7門カ14 〈147443〉

“Kan'na Rengu”

Japanese and Chinese alternate-style poems on *kaishi* sheets as a memorial to Go-yozeiin.

Hand-written. Edo period.

Hiramatsu collection.



〔四四〕 詠諧連歌抄

宗鑑編の俳諧撰集。享禄末年、天文初年頃の成立と見られている。古写本では『詠諧連歌』『詠諧連歌抄』の名を主に用いているが、やがて『犬筑波集』との名が定着し、その名で流布した。最初期の俳諧撰集として重視され、後世に多大な影響を与えた。時に卑俗・卑猥な描写も駆使した、自由奔放な笑いの世界が見られる。

伝本は古写本と古活字本・整版本に分けられ、この頼原本（平出氏旧蔵）を含む古写本は十数本が現存する。諸本は異同が著しく、宗鑑が撰じた当初より、改変が繰り返行われていたものと思われる。その中で本書は最も句数が多く、宗鑑撰以後のものも含まれており、室町期俳諧の集成という意味で価値ある一本である。書写者並びに書写年代はさだかでないが、遅くとも慶長を下らない頃に書写されたものと考えられる。頼原退蔵「校本犬筑波集」（『頼原退蔵著作集2』所収）に翻刻がある。

宗鑑は通称山崎宗鑑。生没年未詳。宗長らと交流があった。（F）

〔44〕 詠諧連歌抄

1冊 写本 [宗鑑編] [室町時代末頃]写 横帳変形 黄櫨色表紙 本文料紙：楮紙 15.8×10.0cm 無辺界 每半面6行 蔵書印：「平出氏／書室記」（朱文、印主：平出鑑二郎） 奥書：「嘉永元戊申冬十月廿七日一読抄録了／今古園主人」

文 國文學|頼原文庫|Hcl97貴 (855980)

"Haikai Renga-sho"

Haikai-style poems by Sokan.
Hand-written. Muromachi period.
Ebara collection.

〔四五〕狗獺集（犬子集）

重頼撰の俳諧撰集。五冊。寛永一〇年（一六三三）刊。重頼自序・『玉海集追加』貞室跋文などによると、貞徳門下の重頼と親重（立圃）が俳諧の撰集を企画して作品を集めていたが、両者はやがて不和になり、草稿を持っていた重頼が単独で出版したという。句引によると、総句数一五二八句（ただし実数は一五四二句）、作者は読人不知二三八句を除いて一七八人。四季類題別発句集が二冊、付句集が二冊、上古俳諧（『菟久波集』からの抜粋）が一冊という構成になっている。近世に出版された俳書の最初の集であり、近世俳諧の出発点として、文学史上非常に大きな意義を持つ。

重頼は慶長七年（一六〇二）～延宝八年（一六八〇）。『犬子集』『毛吹草』『懷子』などの俳書を次々と出版し、俳諧の普及に大きく寄与すると共に、自身、俳諧師としての地位を確立した。宗因とは万治頃から親密な交際を持ち、互いに影響を与えあったと考えられる。（F）

〔45〕狗獺集（犬子集）

6巻1冊 刊本 [松江重頼編]
[江戸時代]刊 四つ目袋綴 雷文
地蓮華唐花空押丹表紙 本文料
紙：楮紙 14.4×21.2cm 無辺界
半面12行 末尾墨書：「于時明暦
元年／正月大吉日」

文 國文學Hc12b (180384)

“Enoko-shu”

Anthology of renga-style poems
by Matsue Shigeyori.

Edo period.

〔四六〕 宗祇法師画像

宗祇の肖像画は多く伝えられ、①法体で端坐する座像、②脇息に凭れる座像、③旅姿の騎馬像の三種が知られている。本図は①に相当し、長い白髭を蓄えた宗祇が、墨染めの衣に袈裟を掛けた姿で、上畳に座す。この点は、宗祇生前の肖像（国立歴史民俗博物館蔵）と共通するが、手には何も持たず、膝の上で組み合わせている点が異なっている。京都市立芸術大学附属図書館蔵の土佐派絵画資料肖像粉本に、本図と細部まで酷似する、享保六年（一七二一）の宗祇像がある。

上部色紙型二枚には、近世頃から宗祇肖像画の賛として定着した、「うつしをくわが影ながら世のうさをしらぬ翁ぞうらやまれぬる」（『宗祇集』所載）の一首と、「世にふるは更に時雨の舎り哉」（『萱草』所載）の発句が書かれている。（H）



〔46〕 宗祇法師画像

1 幅 紙本着色 江戸時代 [土佐] 光高画 掛軸 千草色布表紙 50.7cm (本紙：94.3×39.2cm) 落款：「光高ノ之印」 画像上部に宗祇の発句を色紙形に配す 石井家旧蔵 附図 8-42]ノ11 賣別 (719497)
Portrait of renga poet Sogi by Tosa Mitsutaka.
Hanging scroll. Color on paper.
Edo period.

〔四七〕 里村昌程画像

里村昌程は、慶長一七年（一六二二）～元禄元年（一六八八）。江戸幕府に連歌を以て仕えた里村南家第四代目。里村南家は紹巴の師であった昌休を祖とし、紹巴の子孫である里村北家と共に、毎春正月の幕府御連歌始に宗匠として第一の連衆を勤めた家柄。江戸時代を通じて、衰退期連歌界の指導的立場を保っていた。昌程は、昌休の孫である昌琢の子。寛永一三年（一六三六）に家督を継ぎ、この翌年から延宝元年（一六七三）まで、三〇年あまりに渡って、幕府御連歌始の宗匠を勤めた。法橋。

画像上部に、昌程の発句「まよはじとかねて聞置山ぢかな」を付す。（F）

〔47〕 里村昌程画像

1 幅 絹本着色 元禄3年(1690)頃 土佐光成筆 掛軸 砂色布表紙 55.2cm(本紙:95.0×41.3cm) 落款:「光成ノ之印」か、「釋ノ氏」、
「道恕ノ之印」 画像上部に昌程の発句と道恕の賛を付す 石井家旧蔵 附図 8-42|サ11貴別(719499)
Portrait of renga poet Satomura Shotei by Tosa Mitsunari.
Hanging scroll. Color on silk.
Edo period.

〔四八〕 里村昌純画像

里村昌純は、慶安二年（一六四九）～享保七年（一七二二）。里村昌程の子。始め昌勃といったが、寛文八年（一六六八）に昌純と改名。延宝三年（一六七五）に、幕府御連歌始の第三を勤仕し、七年の後、江戸に移った。連歌の再興をはかり、『源氏物語』などの古典にも通じていた。著作に、付句の規範を示した『老の周諄^{くりこし}』や、式目の注釈書『拾螢抄』、作品に『里村家連集』などがある。法橋。

画像上部に、昌純の発句「うつし人月にぞこゝろわれも音」を付す。（F）

〔48〕 里村昌純画像

1 幅 絹本着色 享保6(1721)年 土佐光芳筆 掛軸 砂色布表紙 49.5cm(本紙:85.4×36.8cm) 落款:「光芳ノ之印」か 画像上部に昌純の発句を付す 石井家旧蔵 附図 8-42|サ12貴別(719501)
Portrait of renga poet Satomura Shojun by Tosa Mitsuoki.
Hanging scroll. Color on silk.
Edo period, dated 1721.



〔47〕 里村昌程画像



〔49〕石井了心画像

〔四九〕石井了心画像

石井了心は、生没年未詳。仙台藩連歌師。石井家は、里村昌叱（里村昌休の子）に教えを受けたと言われる了具を祖とする。京都に居住し、代々、仙台藩伊達家に連歌師として招かれた。初春の七種連歌会を猪苗代家と年毎に交代で主催するなど、伊達家宗匠として猪苗代家に次ぐ連歌の家であった。了心は、石井家祖了具の子。作品に、『了心独吟懷旧百韻』がある。

画像上部に、了心の発句「飛はたるひかりを花のうきも哉」を付す。（F）

〔49〕石井了心画像

1 幅 絹本着色 江戸時代 [土佐] 光起画 掛軸 砂色布表紙 52.2cm (本紙: 86.8×33.9cm) 落款: 「光起ノ之印」 了心の発句 (短冊) を付す 石井家旧蔵

附図 8-42Ⅱイ14貴別 (719500)

Portrait of renga poet Ishii Ryoshin by Tosa Mitsuoki. Hanging scroll. Color on silk. Edo period.

〔五〇〕石井了益画像

石井了益は、？元禄一三年（一七〇〇）。仙台藩連歌師。石井了心の孫。元禄八年正月七日に行われた連歌会に名を連ねている。また、二四日には、猪苗代兼柳・兼郁らと共に、連歌の会を催した記録がある。京都で二八〇石を領していた。法眼。

画像上部に、「妙法」として、了益の和歌「四の色の花もたぐへうつりこし空はひとつにみよしの、雲」と、発句「子規まことの夢のあした哉」を付す。

（F）

〔50〕石井了益画像

1 幅 絹本着色 江戸時代中期 [土佐] 光高画 掛軸 砂色布表紙 49.0cm (本紙: 97.6×35.2cm) 落款: 「光高ノ之印」 画像上部に了益の発句と和歌1首を付す 石井家旧蔵

附図 8-42Ⅱイ1貴別 (719498)

Portrait of renga poet Ishii Ryoei by Tosa Mitsutaka. Hanging scroll. Color on silk. Edo period.

〔五二〕石井了瑄画像

石井了瑄は、延宝元年（一六七三）～享保一七年（一七三三）。仙台藩連歌師。石井了益の子。元禄八年正月七日・二四日の連歌会には、父了益とともに名を連ねている。また、『元禄覚書』天巻の「卅四 御知行被下候連歌師并町連歌師」の項に、「一、式百五拾石 新在家南町 松平陸奥守内 石井了瑄」という記載がある。法橋。

画像上部に、「辞世」として、了瑄の和歌「たれもみなならはぬ事と知ながらひとり越ゆく死出の山路を」と、発句「散を見よあな卯花の一盛」を付す。

（F）

〔51〕石井了瑄画像

1 幅 絹本着色 江戸時代 [清水鳳州画]か 掛軸 砂色布表紙 49.2cm（本紙：63.3×36.0cm）落款：「清ノ虎」了瑄辞世の句を付す 石井家旧蔵

附図 8-421イ15 貴別 〈719503〉

Portrait of renga poet Ishii Ryosen.

Hanging scroll. Color on silk. Edo period.

〔五二〕石井了民画像

石井了民は、？～享和元年（一八〇二）。仙台藩連歌師。石井了瑄の孫。宝暦三年（一七五三）家督を継ぐ。法橋。

画像上部に、「重村君の仰にしたがひて奉る」として、発句「おくはいさ花を枝折のつゝじ原」を付す。（F）

〔52〕石井了民画像

1 幅 絹本着色 江戸時代 画者不詳 掛軸 砂色布表紙 45.2cm（本紙：85.0×32.5cm）落款なし 了民の発句（短冊）を付す 石井家旧蔵 附図 8-421イ13 貴別 〈719502〉

Portrait of renga poet Ishii Ryomin.

Hanging scroll. Color on silk. Edo period.

〔五三〕石井了珪画像

石井了珪は、生没年未詳。仙台藩連歌師。石井了民の子。文化・文政年間に活躍。号菊水亭（または掬水亭）。京都の粟田唐戸鼻町に居住していた。法眼。画像上部に、「年内立春ありけるとしの暮に」として、了珪の発句「春の日もそへてぞをしむ年の暮」、「試筆」として、「若水の底にも見えけり老の影」を付す。（F）

〔53〕石井了珪画像

1 幅 絹本着色 天保壬寅（1842）年 西山逸民子圖 掛軸 千草色布表紙 52.2cm（本紙：90.5×38.5cm）落款：「高ノ陽」了珪の発句（短冊2枚）を付す 石井家旧蔵

附図 8-421イ12 貴別 〈719505〉

Portrait of renga poet Ishii Ryokei by Nishiyama Itsuminshi.

Hanging scroll. Color on silk. Edo period, dated 1842.

〔五四〕石井了珀画像

石井了珀は、？～文久二年（一八六二）。仙台藩連歌師。了珪の子。法眼。画像上部に、「了珀の発句「おほかたの秋は物かは袖の露」と、「秋自西来」として、和歌「あらしやと柳をみれば西にふくかぜの一葉をまづさそひけり」を付す。（F）

〔54〕石井了珀画像

1 幅 絹本着色 江戸時代 對松画 掛軸 千草色布表紙 36.2cm（本紙：94.2×33.8cm）落款：「藤ノ嶋」、「對松ノ之印」了珀の発句と和歌1首（短冊2枚）を付す 石井家旧蔵

附図 8-421イ16 貴別 〈719504〉

Portrait of renga poet Ishii Ryohaku by Taisho.

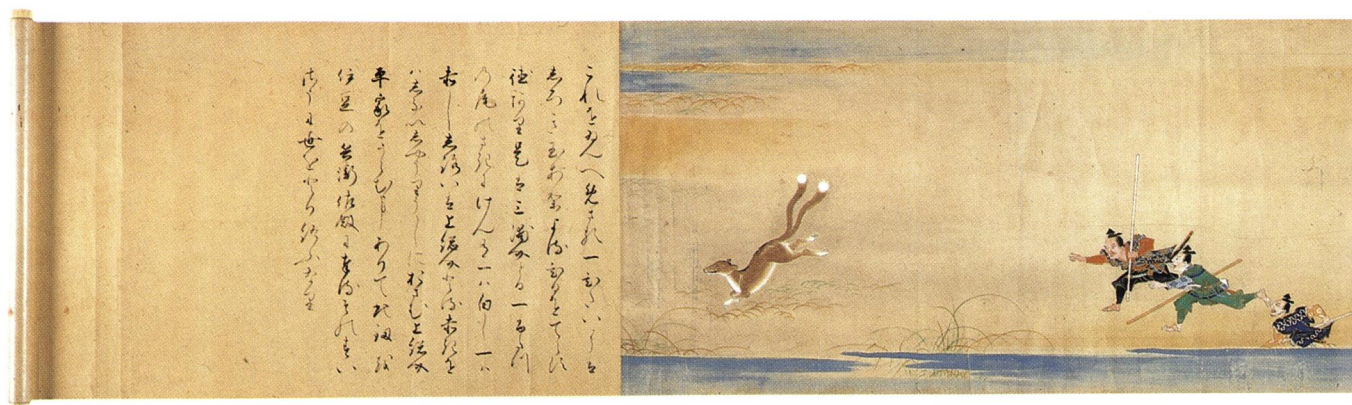
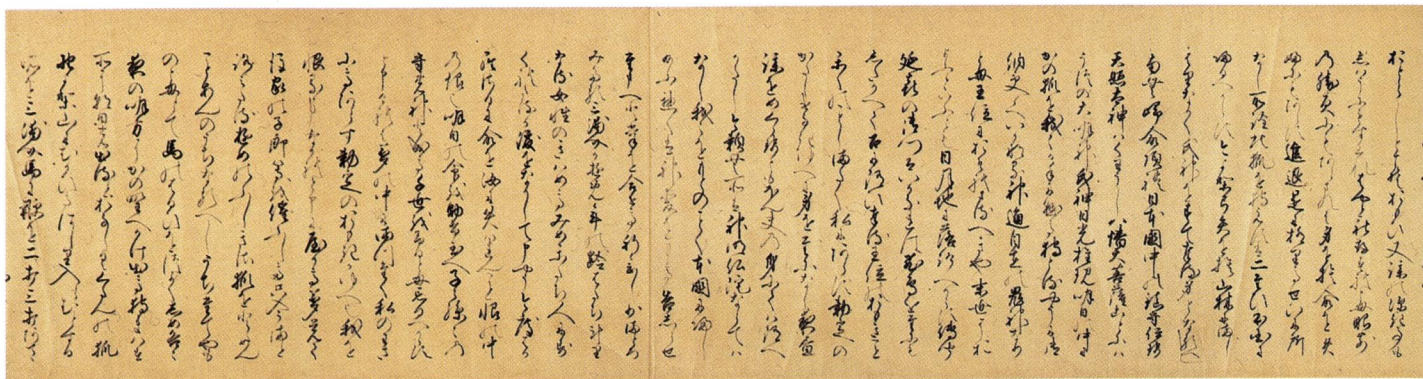
Hanging scroll. Color on silk. Edo period.

養老四	七二〇	『日本書紀』、日本武尊と乗燭者との片歌問答が見える。
天平 _{壬子} 三	七五九	『万葉集』、大伴家持と尼との唱和が見える。
延喜五	九〇五	『古今集』
天曆五	九五二	『後撰集』、巻六に連歌が入集。
寛弘四	一〇〇七	『拾遺集』、連歌六首。
永久三	一一一五	『俊賴髓腦』このころまでに成、初めて連歌が論じられる。
天治一	一一二四	このころから、有仁ら鎖連歌（長連歌）を興行。
天治二	一一二五	『金葉集』二度本成立、初めて連歌が部立てに入る。
元久二	一二〇五	『新古今和歌集』
建永一	一二〇六	後鳥羽上皇、有心無心連歌を興行。
承久三	一二二二	『八雲御抄』ほぼ成。連歌式目の萌芽が見られる。
寛元三	一二四五	このころから、花下連歌が盛んとなり、道生らが活躍。
正慶二	一二三三	鎌倉幕府滅亡。
建武一	一二三四	『二条河原落書』、連歌の流行を伝える。
延文二	一二三七	『菟久波集』準勅撰となる。
応安五	一二七二	『筑波問答』（良基）。良基、救済の助力で「応安新式」を制定。
応永七	一四〇〇	『風姿花伝』成。
永享一	一四二九	永享年間ごろ、宗砌・智鑑、名声を得、連歌中興期に入る。
文安五	一四四八	宗砌、連歌宗匠・北野連歌会所奉行となる。
享徳一	一四五二	兼良、宗砌の助言を得て「連歌新式」を制定。
長祿一	一四五七	能阿、連歌宗匠となる。
寛正四	一四六三	『よさめい』と（心敬）
文正一	一四六六	『長六文』（宗祇）
応仁一	一四六七	応仁の乱
文明四	一四七二	『角田川』（宗祇） 『古今和歌集両度聞書』（宗祇）

文明六	一四七四	『萱草』（宗祇）このころまでに成。
文明八	一四七六	『連珠合璧集』（兼良）『竹林抄』（宗祇）
長享二	一四八八	『水無瀬三吟百韻』（宗祇・肖柏・宗長）
延徳一	一四八九	『園塵』第一（兼載）このころまでに成。
延徳三	一四九一	兼載、連歌宗匠・北野連歌会所奉行となる。
明応四	一四九五	『湯山三吟百韻』（宗祇・肖柏・宗長）
明応八	一四九九	『新撰菟久波集』
明応九	一五〇〇	『竹馬狂吟集』、俳諧撰集の嚆矢。
文龜二	一五〇二	『湯山聯句』
大永二	一五二二	宗祇、箱根湯本にて客死。
大永四	一五二四	『伊勢千句』（宗長・宗碩）
天文一	一五三二	『伊庭千句』（実隆・宗長・宗碩）
天文五	一五三六	『犬筑波集』、享祿末から天文初年の間に成か。
天文九	一五四〇	宗牧、連歌宗匠となる。
永祿四	一五六一	『守武千句』
永祿六	一五六三	『飯盛千句』（宗養・長慶ら）
天正一	一五七三	『称名院追善千句』（紹巴）
天正六	一五七八	室町幕府滅ぶ。
天正一〇	一五八二	『天正狂言本』成、狂言の素材に連歌・俳諧が見える。
天正一三	一五八五	『愛宕百韻』（紹巴・光秀ら）興行。
文祿三	一五九四	紹巴、『至玉抄』を秀吉に献じる。
慶長七	一六〇二	『毛利千句』（紹巴・昌叱）
慶長八	一六〇三	江戸幕府開設。
慶長一五	一六一〇	『無言抄』刊。
元和一	一六一五	貞徳、地下における和歌・歌学の第一人者となる。
元和七	一六二二	『高野千句』（昌琢）
寛永一〇	一六三三	柳宮連歌始まる。 『犬子集』成。

電子図書館に公開された貴重書

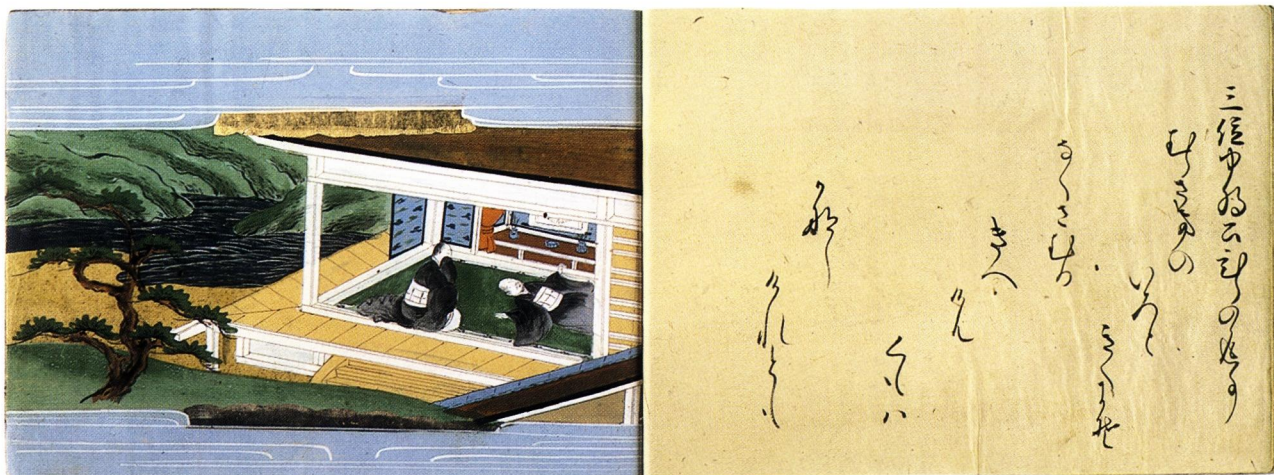
たま藻のまへ（玉藻の前） “Tamamo no Mae”



付喪神 “Tsukumogami”



西行物語 “Saigyō Monogatari”



ぎわう（祇王） “Gio”



国女歌舞妓絵詞 “Kunijo Kabuki Ekotoba”



【主要参考文献】

- ・伊地知鐵男『連歌集』〈日本古典文學大系 三九〉（一九六〇、岩波書店）
- ・福井久藏『連歌の史的研究』（一九六九、有精堂出版）
- ・金子金治郎『連歌古注釈の研究』（一九七四、角川書店）
- ・木藤才藏『連歌論集』二一四〈中世の文学〉（一九八二―一九九〇、三弥井書店）
- ・島津忠夫『連歌師宗祇』（一九九一、岩波書店）
- ・奥田勲『宗祇』〈人物叢書〉（一九九八、吉川弘文館）
- ・『仙台人名大辞書』（一九三三、仙臺人名大辞書刊行會）
- ・『仙台市史』五（一九五一、仙台市役所）
- ・『宮城県史』一四（一九五八、宮城県史刊行會）
- ・『國史大辞典』（一九七九―一九九七、吉川弘文館）
- ・『日本古典文学大辞典』（一九八三―一九八五、岩波書店）
- ・『新撰京都叢書』一（一九八五、臨川書店）
- ・『三百藩家臣人名事典』（一九八七―一九八九、新人物往来社）
- ・『国書人名辞典』（一九九三―一九九九、岩波書店）
- ・『俳文学大辞典』（一九九五、角川書店）
- ・『京都市姓氏歴史人物大辞典』〈角川日本姓氏歴史人物大辞典 二六〉（一九九七、角川書店）

執筆

- 中島 貴奈（京都大学大学院文学研究科国語学国文学専修）
- 長谷川千尋（京都大学大学院文学研究科国語学国文学専修）
- 藤原 由華（京都大学附属図書館情報サービス課参考調査掛）
- 古川 千佳（京都大学附属図書館情報管理課目録掛）

あとがき

本図録は、平成十二年度京都大学附属図書館秋期公開展示会「連歌の世界」及び二〇〇〇年京都電子図書館国際会議併設展「電子図書館に公開された貴重書」の出陳目録として編集いたしました。また、本図録中に連歌の歴史を知るよすがとして、関連年表を挿入しました。文学形態としては世界でも類例の少ないこれら連歌の、ご鑑賞の一助になれば幸いです。

今回の展示会では、附属図書館所蔵の資料とあわせ、文学部および総合博物館所蔵の貴重資料を展示させていただきますました。ご協力いただきました関係各位に深く感謝いたします。

また、近年京都大学附属図書館がすすめております電子図書館による貴重書の公開についてもふれております。ご参考になれば幸いです。

本図録の作成にあたり、執筆を担当いただいた方々には、本務多忙のところ多大のご協力をいただきました。記して感謝いたします。

(編集担当…吉井紀子)

担当

*担当課長・片野孝保(京都大学附属図書館情報サービス課長)

主査・吉井紀子(情報サービス課専門員)
委員・木津祐子(研究開発室)

松田 博(情報サービス課雑誌・特殊資料掛)

藤原由華(情報サービス課参考調査掛)

中藪重美(総務課経理掛)

中川美恵(総務課経理掛)

堤 豪範(情報管理課専門員)

浜口敦子(情報管理課電子情報掛)

古川千佳(情報管理課目録掛)

*協力者・木田章義(京都大学附属図書館研究開発室・
大学院文学研究科教授)

長谷川千尋(大学院文学研究科国語学国文学専修)
中島貴余(同)

*電子展示・情報管理課電子情報掛

平成12年度公開展示会「連歌の世界」

併設展 電子図書館に公開された貴重書

(2000年京都電子図書館国際会議)

2000年11月1日

編集・発行

京都大学附属図書館

〒606-8501 京都市左京区吉田本町

印

刷

(株)石田大成社

〒604-0087 京都市中京区丸太町通小川西入